

報 特 攻
 平成11年8月
 第40号
 〒105 0001 東京都港区
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090
 編集人 田中賢一
 発行人 木村元正

知覧特攻基地慰霊祭

理事長 最上貞雄

今年も例年の通り5月3日知覧に於て特攻戦没者の慰霊祭が厳肅盛大に執り行われた。今年は4月の選挙にて新たに町長に選ばれた宮原光志氏が知覧特攻慰霊顕彰会会長として始めて主催された。北は北海道から南は沖縄まで全国各地より二〇〇名に及ぶ遺族を始め、各界、各団体の代表者、各期各会の戦友等一〇〇〇名に達する参拝者で、大天幕の会場も人で溢れていた。

13時30分開式、黙祷、読経があり其の間宮原会長、塗木名譽町民(元知覧町長)、遺族と焼香が続く国会議員、県会議員、知覧町議員、自衛隊代表、偕行社、特攻隊戦没者慰霊協会、航空碑奉賛同人会、鹿児島偕行会、陸士57期生会、特操会、各地少飛会、航養会、甲飛会等の代表と関係者諸氏の指名焼

香が続き特に今年は大韓民国総領事、在日大韓民国鹿児島地方本部より焼香が行われた。

焼香後宮原会長の追悼のことばに続いて県議員、町会議員、遺族代表、偕行社代表(57期生代表)、特操会代表、全国少飛会会長の慰霊のことばが捧げられた。遺族代表は20年3月26日九九襲撃機で那覇南西洋上で特攻戦死された陸上55期伊倉堂用久氏の令弟伊倉堂用八さんで沖縄より駆けつけられ切々たる慰霊のことばに一同肅然と涙ぐんだ。

献詠は詩吟朗読錦城会の木村錦香先生とその弟子4名によって吟詠された。町長の挨拶があった。

新人歌手の一愛(にのまえあい)さんの鎮魂歌「雲のうつし絵」が歌われ感極まって涙を流す方々が見受けられた。この歌は作詞家の星野哲郎氏が昨年春「知覧特攻平和会館」を始めて訪

目次

知覧特攻基地慰霊祭	1
特攻隊員の日記①	2
原田菜少尉の句	9
忘れたい人たち 回天②	10
沖繩「義烈」碑前祭	15
義烈空挺隊員の遺墨	16

特攻殉国之碑慰霊祭	18
神風金剛隊福山正通少佐	20
「後に続くを信ず」に込める	21
特攻隊鎮魂歌と歌手	22
決号作戦における特攻準備	27
名越氏のアメリカ取材報告	28
短歌で偲ぶ陸軍挺進部隊史	28

れ、沖縄の空で散華した若き純心な特攻隊員の遺書や写真等展示物を見出し、日本の美徳、やわらぎ、独立心と、いったものが、ほころびつついま、彼らの清らかな祈りをせめて一篇の詩歌に書きとめられたのがこの「雲のうつし絵」である。

最後に自衛隊音楽隊の伴奏で「加藤隼戦斗隊」と「同期の桜」を全員で合

唱、感激の内に式を閉じた。

戦争体験者は皆高齢となり減少してきているが、お子様お孫様の代の方々の参拝も増え、又一般の方も特攻隊の壮烈な偉績に感佩しお詣りされる方が増えてきたと思はれる。我が協会も戦没特攻隊員の慰霊顕彰事業に更に一層の努力を払わねばならぬと深く肝に銘じた次第である。



遺族代表が慰霊のことを述べる



参加者全員が献花

特攻隊員の日記①

——「原町戦没航空兵の記録」より——

ス、筆不精故、怠ル
 コトガアルカモ知レ
 マセンガ、死後、何
 モ知ル手段ガ無イカ
 モ知レヌト思ツテ努
 八紘部隊ノ中隊長ハ総テ五十六期ナル
 ヲ見ヨ、吾等八名ハ共ニ皇國ノ運命ヲ
 担ヘル決戦兵力ナリ
 「諸子ハ航空ノ虎ノ子デアル」ト言ハ
 レシ五十六期、今ヤ統々決戦場ヘ馳セ
 参ジツ、アリ、而シテ我モ亦其ノ一員
 タルノ幸福ヲ得タルナリ
 地図、航空被服、雑品等受領ノ手筈
 夜、部隊長閣下ニ招カレテ三浦隊ト共
 ニ将校六名、御宅ニ伺フ
 今西正二モ吾等ト仙幼同期ナリキ、御
 子息ヲ戦病死ニテ失ヘル閣下ノ心中、
 如何バカリカ残念ナラン
 嗚呼、命トアラバ、如何ナル悲惨ナル
 死ニ方ニモ甘ンズベキガ軍人ナルニ、
 此ノ上ナキ死処ヲ与ヘラレテ、只々有
 難シト思フノミナリ
 夜、大洗ホテルニテ送別ノ宴、感激ガ
 大ゲサ過ギル氣モスレド、或ハソレガ
 当然ナルヤモ知レズ
 後ニ続く者雲ノ如シ
 其ノ意氣、其ノ熱意、其ノ誠心ヲ信ズ
 レバコソ……
 只々有難ク、嬉シク、皆テ泣ク
 皇國ノ無窮ヲ信ジ
 大東亜戦必勝ヲ信ジ
 後ニ続く者ヲ信ズ
 カクテ吾等ハ安心シテ往キ得ルナリ、
 とこしへに守らざらめやうるはしき
 吾が日の本の 大和島根を

この書物は第一部原町陸軍飛行場
と合記者、第二部戦没航空兵の日記
第三部おもかげ、の三部より成る。

メテ書ク積リデス
遺書ト思ツテ読ンデ下サイ
十月十八日
懐シキ原町ヲ去ル

原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会編
集、五七〇ページの大作である。こ
の第2部には原町飛行場に関係する
戦死者一七柱の日記が載っている。
ここに編集者の了解を得て、特攻戦
没者のものを転載させてもらう。

なお本書をお求めになり度い人は
福島県原町市木町1-79ヤマキ薬局
内同会事務局に申込みばよい。定価
五、二五〇円(送料別)

山本 卓美

自昭和十九年十月十八日
至昭和十九年十二月六日

昭和十九年十二月七日戦死
(特攻・比島レイテ島オルモック湾)

八紘部隊第八隊 勳皇隊隊長

母上へ

原町出発以後ノ状況ヲ御知ラセシタイ
ト思ヒ、暫ク止メテ居タ日誌ヲ書キマ

我が隊ハ八紘部隊第八隊
嗚呼若冠二十歳ノ五十六期ニシテ十二
機ヲ率キ中隊長タラントス

試験飛行ヲ実施、思ヒシヨリモ調子良
シ、砲調整、羅針修正モ大半終ル

七度も 生れ替りて 護らばや

田へ、職員宿舍へ落著ク
諏訪部大尉殿ト共ニ皆川ヲ訪レ、岩間
「アパート」ニ宿ス、諏訪部サンニハ
肉親ノ如キ親シミヲ感ズ
十月十九日

試験飛行ヲ企画セルモ果サズ
終日羅針盤修正ト砲調整
二瓶モ東モ実ニ良ク働ク、勿体ナキ部
下ト思フ
純真無垢ナル少年飛行兵六名、我が中
隊ハ皆若シ、若サガ我等ノ強ミナリ、
力ナリ
出発ヲ二十五日ト予定ス、澄谷等ニ会
ヘヌハ残念
十月二十二日

突然出発早クナリテ明日トナル
整備未ダ不充分ナルモ止ムヲ得ズ
残りノ羅針修正、試験
午後、九機ニテ編隊飛行
航空被服受領
夜、部下ニ訓話
「死ニ花咲カス」事ヲ考ヘル丈デモ、
ソレハ私心ナリ、吾等ニハ只任務アル
ノミ、光荣アル任務、華々シキ任務ヲ
受ケタルハ吾等ノ幸運ナリ、此ノ任務
ヲ与ヘ下サレタル
大元帥陛下ニ対シ奉リ、只々恐懼、有
難シ、忝ナシト思ヒ、且、此ノ名譽ヲ
辱シメザルノ大努力ヲ決意セザルベカ
ラス

三浦還ル
十月二十日

羅針盤修正ニテ一日ヲ暮ス
三浦ハ航本へ連絡ニ
夜ハ相変ラズノ諏訪部サンノ駄法螺

大元帥陛下ニ対シ奉リ、只々恐懼、有
難シ、忝ナシト思ヒ、且、此ノ名譽ヲ
辱シメザルノ大努力ヲ決意セザルベカ
ラス

わが大君の 治す御空を
部隊ノ「マーク」ヲ考フルモ、機番ガ
邪魔トナリ標記シ得ズ

十月二十四日 晴
ものゝぶの
門出を祝ふ 日本晴

愈々出発ノ日
二機、冷却器「パンク」ニテ困却セル
モ三浦中隊ヨリ貰ッテ間ニ合ハス
飛行部隊全員整列ノ前ニテ挨拶
部隊長閣下、参謀総長代理、航空総監
代理ノ訓示アリテ、出発

訣別ノ辞

比島ノ決戦ハ皇國ノ運命ヲ決ス 決戦
ノ凡テハ制空戦及補給戦ニ在リ 即諸
士ガ一機一艦船克ク空母及輸送船ヲ撃
滅スルヤ否ヤニ依テ此ノ決戦ノ勝敗即
大日本ノ運命ハ決ス

茲に山本中尉ノ統率スル八紘飛行隊第
八隊ヲ送ルニ方リ武人トシテ最高ノ武
運ニ恵マレタル諸士ノ幸運ヲ祝福スル
外 更メテ述ブル辞ナシ 諸士ノ父母
兄弟亦我等ト思フ同ジクスルコト信ジ
テ疑ハズ

最後ニ諸士ニ告グ 銚田教導飛行師団
最后ノ一人一機ニ至ル迄必ず諸士
ニ統キ醜敵ヲ殲滅シ 皇運ヲ泰山ノ安
キニ置キ奉ランコトヲ誓フ
諸士安ンジテ征ケ

今西少将

部下ヲ犬死サセヌ事、只ソレ丈
出発ノ際感激ナキニハ非ザレド、余ハ

比較的冷靜ナリキ、見送ル人々ヨリモ
十二機堂々銚田上空ヲ出発
宮城ヲ拜シ
富士ヲ仰ギテ

美シキ日本、嗚呼、吾ヨクゾ日本ニ生
レタル、湧然タル感激感動始メテ生ズ
雲一ツナキ好天ニ、巍然聳ユル雪白ノ
富士ヲ仰ギテ何トイフ事ナシニ涙トル、
母上ノ、同胞ノ住ム帝都ヲ後ニ、大阪
へ

大空に 棹を握りて 涙しぬ

真白に高き 富士を仰ぎて
悠久ノ日本、必ず護リ抜カント誓フ
米鬼ども 来らば来れ とこしへに
我が日の本は ゆるぎなければ
無事全機柏原着、一安心、
菅谷大尉殿ニ甘エテ充分整備センコト
ヲ期ス、一機気筒割レ

八尾、ます屋ニ宿泊、夜映画ヲ見ル
十月二十五日 雨
天候余リ香バシカラズ、整備
遂ニ雨降り出シ、一日中降り続ク
菅谷大尉殿ノ御厚意ニ甘エテ整備モ思
フ存分ニ実施シ得タリ

気筒交換、ペラ交換、砲調整修理等、
整備出来ル所デ徹底シテ実施セン事ヲ
期ス
藤井少佐、佐藤栄来ル

藤井少佐、佐藤栄来ル

「マーク」記入、徹夜ニテ作業ノ由感
謝ノ外ナシ
新宿荘二宿シ、図ラズモ航空廠ノ宴会

ニ引張り込マレ、大分飲マサレ弱ル、
感激性ニ富ム親切ナ良キ人々許リナリ
五十四期日高大尉殿ト十一時過迄遊ブ

十月二十六日 晴

好天気ニ乗ジ出発セント朝ヨリ整備ヲ
急ギシモ、遂ニ二十四時ニ間ニ合ハズ、
プロペラ一機、地上衝突一機、「タン
ク」及電機一機、尾輪一機等、予期セ
ザル故障続出、出発中止ノ止ムナキニ
至ル

ラジオニテ神風特攻隊ノ戦果ヲ聞キ、
未ダ内地ニ愚図愚図シアル現状ヲ思
ヒ、焦燥ノ感無キヲ得ズ
十月二十七日 曇後雨

九時出発ヲ期シ整備ヲ急ギ、概ネ完了
セルモ、予期セザル故障続出、漸ク十
二時出発準備完了

時既ニ遅ク九州、四国共雨トナリ逐次
悪化、訓練ヲ兼ネ引返ス覚悟ニテ出発
セントセシモ、視度不良ノ為、遂ニ涙
ヲ吞ンデ中止

嗚呼、止ンヌル哉
慎重、慎重、大事決行迄ハ
見送りノ人々ニ相済マザルモ、中止ヲ
宣言ス、仲々肚ノ要ル事ナリ
空襲警報 分散セルモ敵機ヲ見ズ
植木行方不明、心痛ナリ

植木行方不明、心痛ナリ

昼夜共揮毫攻メニ会フ、禿筆ヲ呵シテ
書キ撲ル
立テ統ケニ数首ヒネリ出ス、風流気ナ
キ武骨男ノ筆下手ハ困リモノ

〇八紘に 御稜威の光かゝりやし
われ南溟に 雲と散らなむ
〇みたみわれ 武夫たりし甲斐ぞあれ
今南海に 華と散り得て

〇ゆるぎなき大和島根と とこしへに
我が荒魂は 天翔らなむ
〇身はたとへ 南の果に散らむとも
守り抜かばや 大和島根は

〇比ぶなき 幸かな我等 選まれて
今決戦の 華たらんとは
〇わが後に 続かむ者は 数多あれば
とはにゆるがじ すめらみくには
学徒ト共ニ夜遅ク迄語ル

十月二十八日 曇
今日コソハト意気込ミテ飛行場ヘ赴ク、
天候香シカラザルモ、飛行可能ト判断
シ出発、歡呼ニ送ラレテ新田原ヘ一五
戦隊ト共ニ著ク、背風ニテ大分苦勞セ
ルモ車輪屈曲一機、作動油モレ一機ニ
テ済ミシハ何ヨリ

航空寮ノ特別給養ニテ祝宴
若林、山岡等ニ会フ
十一月二十九日 晴
新田原ノ天気ハ良好ナラザルモ、氣象
偵察機ノ報告ニヨリ、飛行可能ト判断
シテ出発ス、種子ヶ島迄視度不良、下

新田原ノ天気ハ良好ナラザルモ、氣象
偵察機ノ報告ニヨリ、飛行可能ト判断
シテ出発ス、種子ヶ島迄視度不良、下

新田原ノ天気ハ良好ナラザルモ、氣象
偵察機ノ報告ニヨリ、飛行可能ト判断
シテ出発ス、種子ヶ島迄視度不良、下

層雲多く、相当苦勞ス、奄美大島以后ハ快晴

沖繩北飛行場ニテ補給後、直路台北ニ向フ、夕刻台北著、着陸ハ視度不良ノ為大分苦勞セリ

一機尾輪引込ミ、一機尾輪バンクノ外無事ニ着陸、先ツ安心ス

西參謀殿ニ案内セラレ、北投温泉ノ「佳山」へ、酒ト、肴ト、舞踊ト、歌ト到ラザルナキ欲待ヲ受ケ、既ニ此ノ世ノ人ナラズ

飯島実代子サンヨリ血染ノ鉢巻ヲ贈ラ

ル、感激ニ堪ヘズ

十一月三十日 曇

ユックリ朝風呂ヲ浴ビテ御馳走ヅクメノ朝食、堀江国民学校ヨリ贈ラレタル卵ニ舌鼓ヲウツ、写真撮影後、九時出

発、FD司令部ニ到ル、參謀殿ノ好意ニテ比島方面ノ情報、艦船攻撃ニ関スル資料等ノ学科ヲ受ケ、又同期生大藤、石垣、河野、小国等ト会フ(FDは飛行

師団)

前ノ庭ニテ師団長閣下以下ト会食、北川閣下モ来ラレ仲々ノ盛会ナリ

御賜ノ煙草、御供米等ヲ戴キ感激ス

新聞記者ノ総攻撃ニ会フ

飛行場ニ到リ試運転実施、異状ナキヲ確メ、二瓶ノ叔父サンノ家ニ寄リタル後宿舎ニ歸ル、佳山ノ待遇筆舌ニ尽シ難シ、帰ルヤ否ヤ搦キ立テノ餅、大福

更ニ麦酒ト肴ノ猛攻アリテ、後ニ控フルスキ焼キ、舞台ニテハオ嬢サン方ノ舞踊、美代子サン姉妹ニモ踊ラセテ、全ク思ヒ残ス所ナシ

此ノスキ焼キノ材料ハ台北市長ノ贈リ物ナリト、全ク感謝ニ堪ヘズ

宴半バニシテ北川閣下ニ招カレ、更ニ二瓶、東ト共ニ第二次会へ、五十六期ノ精銳ヲ集メテ騒ギ抜ク、軍司令官ヨリ贈ラレシ鮎、西瓜、鳳梨等モアリ

浜までは

海女も哀暮る時雨かな

是、北川閣下ヨリ贈ラレタル言葉、肝ニ銘ズ、騒ギ疲レテ帰レバ、又モヤ寿司、嗚呼我が腹ノ一ツナルヲ如何ニセ

ン

美代子サンノ心憎キ迄ニ誠心籠レル親切ヲ受ケ、感謝、只感謝ノミ

註、美代子サントハ此ノ宿舎ノ小母サンノ姪ナリ

十二月一日 曇

早ヤ今年モ終リノ月ニ入りヌ

兵長等伍長ニ任官(士官ハ少尉任官)名残り尽キザル思ヒ出ノ佳山ヲ下リテ飛行場へ、山ノ下迄一同送り来ル

天候不良ナルモ、師団長閣下以下ノ見送りニ、出発スルニ決ス

周囲ノ山々ハ黒雲垂レ込メテ相当不安アリ、申告モ終リ、目的地モ「マルコツト」ト決定、イザ出発セントセシニ、

六号機尾輪引込ミ、大慌テ予定ヨリ約二時間遅レ、盛大ナル見送りノ中ヲ離陸

美シキ思出、台北ヨ、サラバ

桃園一新竹、雲高低ク、超低空ニテ漸ク飛行、台中頃ヨリ雲上ニ出デ、嘉義ニテ再ビ雲下ニ潜リ、視度不良ノ中ヲ漸クニシテ屏東ヘスベリ込ミ

一機スピナー脱落ノ外異状ナシ、安心

見送リノ盛大モ考ヘモノナリ、飛行部隊トシテハ全ク有難迷惑、台北モ半バ

ハ追出サレタル恰好ナリ

屏東ニテ第四特攻隊ノ遠藤以下ニ会フ夜ハ婦人会ノ方々ノ接待ニ与リ稍々呑ム

十二月二日 曇

地区司令官ヨリ追出サレントシタルモ二機ベラ交換、一機尾輪引込ミノ修理ノ為、明日ニスル如ク頑張ル、真ニ特

攻隊ノ為ヲ思フ人ナラバ、ト考ヘサセラル、慎重第一ガ究極ノ目的ニ合スルヲ信ズレバコソ

十二機揃ッテ此処迄来レルニ、今更一部ヲ残シテ追及セシムルヲ得ンヤ

一日中整備、第四、八絃隊ノ出発ヲ見送ル

鳳山戦車隊ノ同期生ニ会フ

夜、舞踊モアリテ仲々ノ盛会ナリ

十二月三日 晴

午前一杯整備、早目ニ昼食シ、十二時半頃離陸、婦人会、女学校等見送り盛大ナリ

空中集合、航進発起セルニ一機見エズ、引返シ見ルニ、再度離陸ノ途中ナリ、安心ス

愈々晴レノ比島入りナリ、高度二千三百、雲上一時間半ニテバシーヲ越エ、ラオアッグ着、砂塵濛々トシテ咫尺ヲ弁ゼザルモ、漸ク着陸、強風ノ為滑走距離ハ短クシテ停ル

燃料補給ニ手間ドリ、十七時過ぎ離陸、リンガエン附近雨ナリシモ突破、二機追求遅キヲ心配ス、アラヤットヲ仰ギ感慨アリ

マルコツト着陸モドウヤラ全機無事、ホット一安心、先ヅ第一ノ難事ハ終レ

リ

全ク肩ノ荷ヲ下シタル心持ト、全機無事ヲ誇リタキ氣持ニテ一杯ナリ、サレド此ノ蔭ニ官民、飛行場大隊ノ援助ト、整備班ノ努力ト、僚機ノ苦心アルヲ忘

ルベカラズ、全ク余一人ノ手柄ニハアラザルナリ

夜遅ク迄分散ニ手間ドリ、十二時過ぎアンヘレスノ宿舎ニ泊ス、乱雑ナル上

蚊帳悲ク、一晚寝ラレズ敵機数機、一晚中ニ巨リ単機攻撃ヲ加ヘ来リ時々爆

弾ノ地響キヲ聞ク

十二月四日 晴

午前中連絡トレズ、アンヘレス宿舎ニテゴロゴロシアリ、食事モアマリ上等ナラズ

何トナク身体ダルシ、高山ニ会フ、奇遇ナリ、午后、迎ヘノ自動車来リテ飛行場ニ赴ク、マニラ、ニールソン飛行場ニ到ルベシトノ指示ヲ受ケ、直チニ出発セントスルモ、分散徹底的ナル為集合ニ時間掛リ、更ニ一機メリ込ミタル為離陸遅レ、十八時將ニ離陸セントスルヤ、入江機尾輪引込ム、止ムヲ得ズ追及ヲ命ジ急遽離陸ス

ニールソン着ハ既ニ薄暮ナリ、着陸時烟霧アリテ視度悪ク、更ニ、飛行場ハ中央高ク傾斜甚ダシキ上ニ無風ニテ、皆滑走著シク延ビ、遂ニ湯浅機、北井機、加藤機、各々小破、中破、大破ス、此処迄来テ飛行機ヲ壊ストハ実ニ残念、更ニ注意ヲ与ヘ置ケバ可ナリシニ等ト

梅ユルモ及バズ
全員ヲ帰シ、四航軍ニ連絡
美濃部參謀殿ニ会ヒ、四航軍作命ニテ四師団ニ編入セラレタルヲ知ル
四師団ニ行ク、近藤少佐殿ニ状況ヲ同フ、レイテ方面ノ戦況ハ一刻ノ猶予ヲモ許サズ、即刻特別攻撃ヲ指向スベキ状況ナリ

之ガ為急速ニ出動準備ヲ完了セザルベカラズ、最初、機首ヲ改修シテ爆薬ヲ

装シ、威力ヲ強化セント希望シ居タルモ、此ノ戦況ニテハ之ヲナス暇モナカラシ

將校ハ偕行社ニ、主力ハ航空寮ニ泊ス
第十三飛行場中隊ノ協力ヲ謝ス
十二月五日 晴

整備班ハ飛行場へ、空中勤務者ハ第四師へ、マニラノ街モ久方振りナリ、以前ト大シテ変リタル所ナク自動車ノ往来繁キニ一驚ス

師団長、參謀長ニ申告
松井等ノ隊ハ鉄心隊トテ、カロカン飛行場ニ在リ、焼カレシ飛行機ヲ補充シテ三機、本日出動スル予定ナリト
富嶽ハ屢々出動(クラークヨリ)シアルモ空母ヲ逸シテ帰還シアリ、石川モ生キアル由、万葉ハ佐々木一機ノミデ昨日今日出動ス

軍司令部ニ赴キ軍司令官閣下ニ申告、古山圭三(同期生)、閣下ノ稚児サントナリテ副官振リモ伸々板ニツキアリ御賜ノ酒、煙草ヲ戴キ乾杯

勳皇隊ト命名セラル、勳皇隊、維新ノ志士ヲ思ハシムル此ノ名、佳イ哉、閣下モ「快心ノ名ナリ」と言ハレタリ、冀クハ此ノ名ニ恥ヂザラン
後、勳皇ト書シタル鉢巻ヲ戴ク
広間ニテ休憩、記者達ト語り写真ヲト
ル、古山ノ親切、何彼ト有難シ、尾形(同期生)モ居リ、一諾ニ昼食ヲ御馳

走ニナル
勝又、南出、軍司令官閣下ノ御意志ニテ夫々進級、行難キ事哉
通信二名、出張ノ名目ナリシモ勳皇隊ノ一員ニ加ヘ、攻撃ニ参加セシムル事トナル

四飛師ニ行キ師団長閣下ト乾杯、折カラ入江機追及、ニールソンニ着陸セルヲ知り、直グ呼ブ、入江ヲ連レテ申告セシメ、軍司令官閣下官邸ニ到ル
久シ撮リニテ風呂ニ入り菓子ヲ食ヒ、ピアノヲ叩キ、一同大イニ寛ログ

四航軍ノ方々ト夕食ヲ会食ス、滅多ニ食ヘザル御馳走許リナリ、殊ニ刺身ノ味ハ忘レラレズ、航士校当時教官タリシ溝口中佐モ高級副官トシテ居ラレ、其ノ他隈部參謀長閣下始メ、皆良キ方々許リナリ、嘉義ニ居リタル芸妓モ加ハリ、五十六期ノ人々ノ話ナドシ、思ヒ出ニ耽ル、
離千代トカ言フノハ踊リ上手ナリ
充分ニ酔ヒテ官邸ニ泊ル
嗚呼、吾ハ幸福ナル哉、全ク思ヒ残スコトナシ

十二月六日 曇

愈々晴ノ出陣ノ時ハ来リヌ
イザ、征カン哉、心ハ躍ル

三十七耗、二〇耗取卸シ、爆彈裝備等二〇四戦隊ト一三abノ協力ヲ得テ作業ヲ急ギ、一方、湯沢、北井、加藤ニ後事ヲ托シ、クラークニ飛行機受領ニ行カシム

機首二百疋一発ヲ増加裝備スルハ一世一代ノ慾ヲ出シタリ
急刻、四飛師ニテ命令受領(abは飛行場大隊)

二十九戦隊、キ84ニテニールソンニ到リ、上橋少佐以下八(六)機ニテ直掩、十五戦隊ノ司偵一機戦果確認、打合せヲ実施ス
折シモ護國隊遠藤、同掩護隊ノ山本(同期)来リ、共ニ征カンコトヲ誓フ
空挺部隊、レイテ島ニ挺進ス、幸先ヨシ、
參謀長殿ト会食
愈々最后ノ夜ナリ

出撃前夜、何ノ感動モナシ
思ヒ出ヅルハ母上ノ顔ノ皺
台北ノ美代子サンノ顔
只々征カン哉、任ノマニマニ
浜マデハ海女モ着ル時雨カナ
機首ニ装シタル一〇〇疋彈、參謀長殿ノ命ニテ遂ニ信管ヲハツスノ止ムナキニ到ル、残念、二百五十疋ノ信管、彈底ナキ為大分モメタルモ、遂ニ片方彈

早速飛行場ニ赴キ出動準備

官邸ニテ御馳走ノ朝食ヲ済マシ、四飛師ニ到ル、果然任務ヲ受領ス
明拂曉、全力ヲ以テレイテ灣敵艦船ヲ攻撃スベシト

官邸ニテ御馳走ノ朝食ヲ済マシ、四飛師ニ到ル、果然任務ヲ受領ス
明拂曉、全力ヲ以テレイテ灣敵艦船ヲ攻撃スベシト

官邸ニテ御馳走ノ朝食ヲ済マシ、四飛師ニ到ル、果然任務ヲ受領ス
明拂曉、全力ヲ以テレイテ灣敵艦船ヲ攻撃スベシト

官邸ニテ御馳走ノ朝食ヲ済マシ、四飛師ニ到ル、果然任務ヲ受領ス
明拂曉、全力ヲ以テレイテ灣敵艦船ヲ攻撃スベシト

底信管ヲツケ行クコトナル、効果少クトモ、爆発ノ確実ヲネラフ、吾等ハ空挺、斬込隊ト異リ此ノ目ニテ戦果ヲ確認シ得ザルヲ以テ、完全、安心シ得ル丈ノ衝突準備ヲ整ヘ置カザルベカラズ

夜、遺品整理

明朝七時離陸

イザ レイテ湾へ

敵輸送船へ

勳皇隊(二式双襲)

- 中尉 山本卓美 陸士56 大13
- 少尉 二瓶秀典 陸士57 大13
- 少尉 東直次郎 陸士57 大12
- 伍長 林 長守 少飛12 大13
- 伍長 入江直澄 少飛13 大13
- 伍長 大村秀一 少飛13 大15
- 伍長 片野 茂 少飛13 大14
- 伍長 白岩二郎 少飛13 大14
- 伍長 増田良次 少飛13 大14

- 伍長 勝又 満 仙10 大12
- 曹長 湯沢 豊 #87 大7
- 軍曹 北井正之佐 #91 大8
- 伍長 加藤和二郎 少飛13 大13

註 #印は転科操縦教育の期を示す



山本中尉と考案の部隊マーク

廣森 達郎

自昭和十八年六月二日

至昭和十八年十月三十一日

(原町在住日記)

昭和二十年三月二十七日戦死

(沖縄)

特攻武烈隊 台湾第八飛行師団

航士五六期

六月二日 水曜日 晴

〇七〇〇大森出発、原町ニ向フ。常磐線ハノロクテ退屈ナリ。一五時五十分頃原町駅ニ到着。駅ハ小ナレドモ初印象ハヨシ。分教場迄トラックニテ輸送セラル。設備ハ完成シ、其ノ待遇タル想像以上ナリ。唯々感謝スルノミナリ。吾人勳マザル可ケンヤ。学生長ハ安楽大尉(五十二期)殿ニテヨキ人ナリ。

六月十九日 土曜日 曇り

午前、血沈検査。編隊ノ要領地上実習。午後、外出。原町国民学校ヲ訪レ、校長ニ面会シ、教育ニ関シ意見ヲ拝聴ス。後三瓶訓導ニ音楽教授ヲ約ス

七月四日 日曜日 小雨

午前、午后共ニ国民学校ニ至リ音楽ヲ学ブ。三瓶訓導ト面接音楽ヲ学ブ。午後、二人ニテ話ス。事、教育界ニ通ジ

日本ノ現状ニ及ブ。其ノ識見ノ卓抜ナルヲ驚キ、更ニ突込ミテ同氏宅ヲ訪レ書籍ヲ借りテ帰ル

教育ハ宜シク熟教育タルベシ、ト。而シテ断々乎ニシテ実行スル同訓導ノ熱ニ感服ス

地位、金、命ヲ捨テテ信念ニ邁進セントスル者コソ偉人ナレ。我方地位ト内容ヲ比シ、誠ニ恥シキ次第ナリ。今精魂ヲ投ジテ人間ノ改革ヲ計ル可キナリ。

次回ハ真ニ胸襟ヲ開キ談セントス

己ガ前途ニ光明ヲ発見ス。記念スベキ日ナリ

(編者注)音楽と教育への関心)

七月十一日 日曜日 曇後晴

雲ノ行クガ如ク、水ノ流ルルガ如キ雲水ノ心境、斯カル心境ヲ望ムナリ。美ハ美トシテ感じ其儘忘レル、誠ニ天空海濶ナリ

「執着心ヲ去レ」目下ノ急務ナルベシ本日危険ナル状態ヲ呈ス。神仏ノ守リニ依リ御奉公ノ期間ヲ長クス

玉川学園ノ生徒来リ、体操ヲ指導ス

音楽ハ体操、操縦、皆関係ヲ有ス

戦闘ハ総ユルモノノ綜合ナリ、今日ヨリ磨クベシ 学園生徒橋本氏ヲ同乗セ

シメ責任ヲ痛感ス

七月十二日 月曜日 晴

〇六〇〇ヨリ演習開始、霧深キ為ニ地上滑走。一部飛行シタレドモ、後中止

演習ヲ終ル一〇〇頃ヨリ、名物相馬野馬追ノ見学ニ行ク。徳川ノ目ヲ忍ンデ、全国諸大名ガ如何ニ苦勞ヲシ武術ヲ練リタルカ、明瞭ニ察知シ得ベシ。其ノ着眼、構想タル、日本戦術の粹トモ云フヲ得ベシ。皇軍戦捷ノ一大理由モ亦是ニ存ス。彼ノ独逸ハ列強ノ目ヲ忍ンデ軍備ヲ整ヘタル如キモ亦之ニ類ス

武備、兵備共ニ制限ヲ受ケザル今日、如何デカ勝ノ軍ヲ鍊成セザル可キヤ。吾人ノ伸ビントスル前ニ障碍ナシ野馬追、内容ニ於テハ古ヲ想起シ得ザルモノナルモ、其ノ勇壯サハ銃後國民ニ大ナル精神力ヲ与ヘン

七月十四日 水曜日 晴

午前 通信
午后、爆撃、体操。

音楽ヲ軟弱ナリト考ヘルハ我国ノ習慣カラ来ルモノニシテ偏見ナリ。將來ノ予想敵國ニ対シ勝ヲ制スルハ、音楽ノミナリ。

今若シ三日醒メズンバ、其ノ場ニ望ミ後悔スルハ明瞭ナリ。軟弱ナリト考フルガ如キ以テノ外ナリ

九月九日 木曜日 晴

飛行演習中飯村少尉武藤少尉殉職ス。

高山少尉着陸時鼻ヲツク。原町分教場極メテ纏リテ三ヶ月無事故ニ通シタルモ、本日二件ノ事故ヲ生ジ、就中二名ノ犠牲者ヲ出シタルハ誠ニ残念ナリ。三〇名ニ足ラザル者一名、即チ全員ノ如ク吾人ノ片腕否手足ヲ取ラレタルガ如シ。後三ヶ月ノ無事故ヲ夢ミテ居タルガ故ニ悲惨ナリ

余ハ航空兵トナリ、目前ニ犠牲者ヲ眺メタルハ始メテナリ。考フレバ愚痴ハ出ズレドモ、今ヤ一切ヲ没却シ直進ス可キナリ。訓練ノ為ノ事故ハ不可避ナリ。之亦南洋空ニ散リシ者ト異ラズ吾人ハ花舞台ヲ考フル前ニ陸ノ力ヲ頼ル可キナリ。我ノ腕ノ蔭ニハ常ニ二人存在セン、地上モ然リ空中ニテモ然リ

九月二十九日 水曜日 晴

昨夜ノ疲勞ノ為七時過ギ迄就床一〇時ノ汽車ニテ飯坂ニ向カフ。着物ノ旅モ悪カラズ、但シ若干涼シ

福島 一帶山近ク聳ヘ東北人ノ気性其儘ナリ。山川ノ人ニ及ボス所偉大ナル哉。飯坂ニ着ク。空腹ニ酒患シト大岡諫メタレバ、川辺ニテ丸屋ノ弁当ヲ分ケテ喰フ。

目的地角屋ニ至ル。風呂ニ入り四ヶ月分ノ疲レヲ流ス。下ハ溪流ナリ。一八時ヨリ会始マル。生レテ初メテノ宴会ナリ。斯クモ盛大ナル催シ、貧困ナル

生活ニ甘シタル余ノ知ル由モ無キモノナリキ
芸妓椿ノ花ノ如シ、人生モ斯クノ如キカ
流ルル水ノ如ク、谷間ノ流ハ無休ナリ快ナル哉人生、九段ノ桜ハ至ル所ニ爛漫タリ

十月二日 土曜日 雨

午前 地上予習
午後 武藤、飯村中尉ノ碑ヲ立テル為小高町ニ行ク。後、二本松家ニ於テ盛大ナル宴ヲ開カル。同部落ノ真心、物質的功利的思想ヲ没却セル真ノ日本人ノ心ニ接シ、強ク感ズル所アリ

十月十二日 火曜日 晴

午前 演習 写真銃射撃
午後 栗拾ヒ 石神村山奥ニ行ク。我ガ故郷ヲ想起スル。

谷間ヲ「ドライブ」シ約一時間俗界ヲ忘ル。自然ノ偉大サハ空中ヨリ寧ロ地上ニ於テ感ズルナリ
家カラ送付セル荷物ヲ受領ス

十月十四日 木曜日 晴
撤収作業ヲ終リテ茸狩、約三時間ニテ松茸四十九本、茸狩ニ於テハ状況判定ト索敵ガ最モ肝腎ナリ。松茸山ノ茸狩ハ興若千少シ一三時半帰校一六時着校原町ニ外出ス

十月十七日

寺ノ一日静寂ソノモノナリ。動中静モ

マタココニ求メ得ベシ。ナンゾ仙台ニ走り、東京ニハシリテ芳ヲ得ンヤ。道ハ近クニアリ、心ヲ休ムルトココロ眼下ニアリ

十月三十一日

浪江ノ青田ノ家ニ至ル。大洋ノナガメハ格別ナリ。返シテハ寄せ、寄せテハ返ス浪、コノ現象ハ神代ヨリ続キナオ無限ニ続カン。ナンゾ瞬時ノ人生ニ迷ワ
十一月四日 木曜日 晴
〇六時五分ノ列車ニテ銚田ニ向フ汽車ノ旅モ久シ振ナリ。石岡ニ於テ途中下車、窪田ノ知人ノ宅ニテ一休、一三時四〇分ニテ銚田ニ向フ。十六時頃到着宿舎ニ就ク。原町ノ物資ノ恩恵ヲ身ニ感ズ

十一月二十四日 晴

夜、本校同期生ニ面会、平井等ト談ス時ノ過グルヲ知ラズ
(編者注 當時の常磐線の時刻参考)

午前、飛行演習。中村附近敵陣地攻撃。最後ノ飛行演習ナリ。原町一帶ノ景色思出深ク印象強シ。三回ノ飛行ニテ名残ヲ断ツ。

午後ハ最後ノ訓示。青田来ル。酒ヲ持チ来タル。後始末ノ為ユックリ遊ブ事モ出来ズ残念。十八時頃原町ニ出ル。別院ニ別レ、荒井ニ別ル。次デ青田ト別ル。二十時ヨリ宴会。

原町ヨサラバ、永遠ニ日本人タレ。
余ガ原町ヨリ得クルモノ日本人ナリ。

——サラバ サラバ

十二月一日

一〇時出航、前例ニ鑑ミ皆真剣ナリ
氣分勝レズ 夕 釜山着
二一時ノ列車ニテ京城ニ向フ

十二月二日

汽車延着シ急行券払戻ヲ受ク

山ノ上宅ニテ一休、窪田ト主道ヲ歩キ
窪田(四字不明)厄介ニナル

二〇時二〇分発 牡丹江ニ向フ

十二月三日

一日ヲ車中ニテ送ル。トランプニテ時
間ノ経過ヲ知ラズ。

夜ハ寝台ニ入ル。食事ハ食堂車一日数

回

十二月四日

関門ニテ税関検査、寝台ニテ南京虫ニ
喰ハル

亦「トランプ」汽車二時間延着

東京城ニテ窪田、山ノ上ト別ル、十四
時過ギ牡丹江着

映画ヲ見ル。一泊、高山来ラス。小林
ト会フ

十二月五日

起床後師団司令部ニ至リ、戦隊ノ位置
ヲ尋ネル

空腹ノ為ニ消耗セリ。駅頭ニテ高山ニ
会フ

旅館ニテ休憩、同期生ト会フ。特ニ料
理屋ニ於テ然リ。

映画見物、同期生会ニ出ズル事ナク帰
リタルヲ遺憾トス

二十二時四十分ニテ立ツ 一等ニ乗ル
二人 千振ニ降ルヤ隊一同ノ出迎ヲ受
ケテ感激セリ

十二月六日

午前挨拶。

午後飛行機ニ搭乗慣熟飛行
戦隊長殿ニ申告

一、第五十六期、中隊ノ幹部タリ

一、率先垂範、第一トス

一、慎重、事故絶無

一、学術能力ノ向上

夜ハ官舎ニ於テ東条中尉殿ヨリ歓迎ヲ
受ク

公刊戦史「沖繩陸軍航空作戦」抜粹

第八飛行師団命令により、南西諸島

に前進する特攻隊の指揮を命ぜられた
神參謀は、二十五日午後、誠第三十二

飛行隊の前進を迎えるため沖繩中飛行
場に行き、地区司令官青柳中佐以下と

共に諸準備を整えて待機したが、二十
五日は遂に到着しなかった。翌二十六

日夕刻、誠第三十二飛行隊(と)第三十

二飛行隊(武克隊)軍偵特攻九機は、廣森
達郎中尉(56期)指揮のもとに沖繩中飛

行場に到着した。神參謀は早速、艦砲
射撃の間隙を縫って中飛行場に到り、

廣森中尉以下に会って部隊の状況を聴
取し、翌二十七日払暁の艦船攻撃を命

じた。誠第三十二飛行隊九機は独立飛
行第四十六中隊の一機と共に、二十七

日払暁、沖繩中飛行場を離陸、独立飛
行第四十一中隊の二機の誘導のもとに、

〇五五〇嘉手納西方海面の米艦船群に
対し、地上軍および島民多数観望の眼

前で全機体当たり攻撃を敢行した。戦
果は大型艦轟沈五、同撃破五と報じら

れた。誘導機二機のうち一機は宮古島
へ帰還した。

この特攻攻撃を指揮した神直道中佐

は、当時の状況を戦後次のように回想
手記している。

私は夕刻艦砲射撃の間隙を縫って飛

行場にかけてつけた。島尻地区の住民達
は延々と國頭地区に向かって避難の道

中である。廣森中尉は凜々しい若い飛
行将校である。眼は澄んで態度は誠に

落着いていた。乗って来た単発機は既
に整備隊の手によって秘匿整備中であ

る。私は廣森中尉と会談し、操縦時間
や訓練度を知った。爆装したことがな

いという。艦船攻撃について教育を受
けたことがないという、その程度の特

攻隊であった。

命令下達後、離陸時刻、重装備離陸
要領、第一旋回の要領、三機編隊の高

度差による対空砲火の分散方法、突撃
開始高度、突撃角度、攻撃部位等、詳

細にわたり教育した。理解してくれ
たかどうか実地訓練するわけにも行かぬ。

説明が終わると廣森中尉は隊員を集め
て話をした。「愈々明朝特攻だ。何時

ものように俺について来い。次のこと
だけはお互に約束しよう。今度生れ変っ

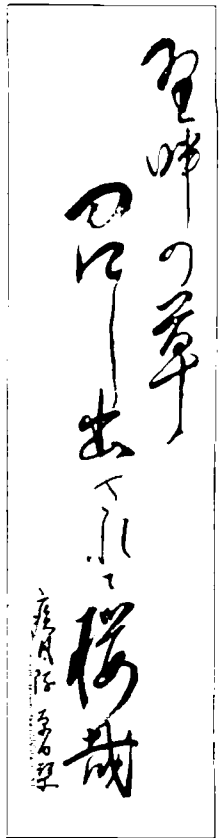
たら、そしてそれが蛆虫であろうと、
國を愛する誠心だけは失わないように

しよう。それを聞いて私は呼吸が断
たれるような衝撃を受け、事実いても

立ってもおられなくなった。私は小群

から足ばやにはなれ、とめどもなく流
れる感激の否、悲しみの涙をどうする

こともできなかった。



あせ
野畔の草

召し出されて桜哉

「朝日におう山桜花」であり、「九段の桜」でもある。

第27振武隊原田葉少尉の遺詠で、知覧特攻会館に真筆が展示されている。

原田少尉は早稲田大学卒、特操1期、20年6月22日都城東飛行場出撃、沖縄周辺洋上で戦死 26才

野畔は一字で「あせ」と読ませたいのであろう。野畔の草でかつてよく言はれた草莽の微臣という感じ、桜は

特攻隊員の遺詠は沢山残っているが、この句は秀歌の筆頭に挙げられる。そして筆跡も秀逸である。

第27振武隊の絶筆集にある原田少尉の文面は一征くものは気易い、残るもの的心情にはホトトギスの慟哭がある

情は涙である。そして愛は切ない。されど忠はさらに至上だ。祖国よ永久に幸あれ。幸あれ」と認められている。

このような文章が生まれたのも、第27振武隊の出撃までの足跡を辿ってみると頷けるものがある。



特攻隊として一番早く

編成された第26、第27の両振武隊はまことに特異な航跡を辿った。20年2月14日に仮編成され当初の目的は比島への特攻であったといわれる。さて2月14日編成後、隊員達は汽車で宇都宮に赴き四式戦を受取り直ちに明野

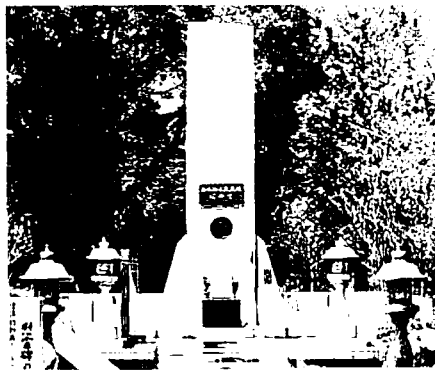
飛行場に赴いた。しかるにその時、既に比島作戦は終了していた。一方、台湾行特攻が急を告げていた為、その飛行機を全機台湾行特攻に譲り、再度宇都宮に四式戦を受取りに戻り、3月9日漸く受領した。以後明野より都城へと転進したが、その後比島の第4航空軍ではなく南京の第5航空軍に配属が決まったのである。

さて、都城西飛行場が3月18日、米艦載機に襲撃された際、特攻機は全機北九州乃至は南鮮釜山飛行場へ転出命令が下され、5時からエンジン始動と同時に各個で移動し去った。その後朝鮮、満州を経て南京に到着した第26振武隊は第25戦隊に、第27振武隊は第85戦隊に各々配属になり、共に南京城外の大校飛行場で特攻訓練を重ねた。

かくするうちに5月1日、第6航空軍への転属が決まり南京より北京、大連、朝鮮と逆コースで九州に戻る事となったが、第26振武隊は当時南京で相良隊長が軽いマラリヤにかかっていた為、隊長と同行した本隊(全員六名)は他より遅れて5月25日頃、雁の巣(福岡)に着いたのである。これとは別に飛行機が故障した四名の隊員は、南京から上海経由で爆撃機に同乗して一足先に5月6、7日頃雁の巣に戻った。それから同18日には知覧に転進し

ていた。本隊は未だ帰国せず、一方沖縄の状況は日々急を告げる折柄、一刻も早くという上からの命令により5月25日、第26振武隊の先着四機だけがむなく知覧から出撃し、この日梅津、小林の両機が特攻突入を行った。

第26振武隊の本隊は6月初め都城東飛行場に到着し、漸くこの時点で生存者七名が全員合流したのである。あとは出撃命令を待つばかりであるが、6月10日頃からの日々、折からの梅雨は一向にやまず、やっと雨があがった21日、午前中に掩体より愛機をとり出した第26振武隊は、午後3時夕空の沖縄をめざして出撃して征ったのである。以上は概ね第26振武隊を中心述べたが、第27振武隊も同様な航跡を辿ったものと思われる。



都城の特攻碑

忘れがたい人たち 回天②

小灘 利 春

久家 稔

略歴：大阪府、大阪商大、海軍兵科
四期予備士官。回天塔乗員。金剛隊
伊53潜でバラオ攻撃に向かったが悪
ガス発生のため発進できず帰還。轟
隊で出撃し母潜伊36が敵駆逐艦の攻
撃を受けて危機に瀕したとき、故障
した艇で海中深くから発進して反撃、
母潜を救った。

久家 稔少尉は大阪商大在学中に学
徒動員で海軍に入り、水雷学校から志
願して回天隊に加わり、昭和19年10月に
着任した。兵科四期予備学生出身の搭
乗員である。

回天特別攻撃隊の第二陣、金剛隊の
伊号第53潜水艦に乗って昭和19年12月30
日大津島を攻撃、バラオ諸島コッソル
水道の敵艦隊攻撃に向かった。当時は
回天と母潜を結ぶ交通筒が装備されて
おらず、艇内で長時間待機していた間
に悪ガスが発生、久家少尉は人事不省
となった。母潜は払暁時であるのに危
険を冒して敵前浮上、彼を救出して艦
内に収容したため生還した。

続いて天武隊の伊36潜で出撃したが

故障で発進できず帰投、三度目に轟隊
の伊36潜で、久家少尉は三期予備士官
の池淵信夫中尉とともにマリアナ東方
海域に向かった。6月28日、池淵中尉
が発進して米軍の攻撃型輸送艦「アン
タレス」と交戦中、救援に駆けつけて
きた大型駆逐艦「スプロストン」が伊

36潜の潜望鏡を発見、突進してきた。
池淵艇の攻撃状況を夢中で見守ってい
た艦長は紙一重のところまで辛うじて潜
没したものの、執拗な爆雷攻撃が絶え
間なく続いた。浸水しはじめた潜水艦
は大きな仰角がかかったまま沈降を続
け、絶体絶命の窮地に追い込まれた。

このとき久家少尉は、自分の艇が電
動縦舵機と電話機の故障のため使用不
能になっていたにもかかわらず、艦長
に繰り返し発進を要請し、容れられ
て深々度の母艦から離れ、海面に浮び
上がったあと機械を発動した。敵駆逐
艦へ、人力縦舵を手で操作しながらの
突撃である。柳谷秀正二飛曹も同じく
海中深くから発進した。我が身を捨て
て断末魔の母艦を護ろうとした二人の
反撃が功を奏し、伊36潜は傷つきなが
らも生還して、次の作戦に備えること
ができた。

久家少尉は回天に身を投じた頃の19
年8月の日記に、

「俺等は俺等の親を兄弟を姉妹を愛

し、友人を愛し、同胞を愛するが故に、
彼等を安泰に置かんがためには自己を
犠牲にせねばならぬ。祖国敗るれば、
親も同胞も安らかに生きてゆくことは
できぬのだ。我等の屍によって祖国が
勝てるなら満足ではないか」
と書きしるしている。

この思いこそ、数多い特攻隊員たち
が心の基盤に抱き、それぞれが生命を
捧げる共通の動機になったと考える。

四期の予備士官では最も早く訓練に
入った組であるから、私どもとも付き
合いが長く、思い出は一段と深い。優
れた運動神経を思わせるスマートな体
つきの、清冽な感じを湛える若人であっ
たが、私にとって最も強く印象に残る
のは、最初の出撃から大津島の基地に
帰ってきたときのことである。心身の
疲労に重ねて深い苦悩、思索があった
であろう。私は壮厳ともいうべき迫力
を覚えた。その久家稔少尉の姿は終生、
脳裏から消えることはないであろう。
二階級特進の栄にふさわしい故・久
家稔大尉の純粋な献身は、この国の今
後のため永く語り継がれることを望ん
でやまない。



轟隊伊36潜出撃記念写真
前列右から二人目が久家少尉

勝山 淳

茨城県、海兵73期、第一特別基地隊
大津島分遣隊。回天特攻多聞隊の伊
53潜水艦の先任回天搭乗員として出
撃、パシー海峡東方の洋上で敵輸送
船団を攻撃、駆逐艦アンダーヒルを
撃沈した。

伊号第53潜水艦は回天特別攻撃隊多
聞隊の一艦として昭和20年7月14日大
津島基地を出撃、レイテと沖繩の間の
敵輸送ルートの攻撃に向かった。甲板
の上に搭載した回天六基の先任搭乗員
は勝山淳中尉であった。色白で快活、
積極的な気鋭の青年上官である。

パシー海峡の東方で7月24日午後、
伊53潜は敵輸送船団を発見した。後ろ
から追いかける不利な態勢である上、
海が荒れていたが、勝山中尉のたつて
の要請で、艦長は中尉の一号艇だけを
発進させた。

相手は七隻の輸送船で艦艇が九隻も
護衛に付いていた。船団の先頭で護衛
部隊を指揮していた駆逐艦「アンダー
ヒル」の艦長ニューカム少佐は潜望鏡
を発見して爆雷攻撃を行い、油の膜が
浮かんで来たのを見て「日本の潜水艦
一隻を撃沈！」と無線電話で放送した
途端に、もう一本の潜望鏡を真近かに

発見し、「衝突用意」の号令をかけて
転舵、突進した。

直後に艦首で大爆発が起こり、破片
と海水が空中千フィートの高さまで吹
き上がり、流のように落下した。艦体
は前部で真っ二つに切断、艦長以下の
上官十人、兵員二十二人が命を落とし
た。

一・六トンの火薬が詰まった回天を
乗り切ったためか、回天の搭乗員が操
縦して命中したのか、一体どちらなの
か判らないのは、爆発の前に多数の乗
員が艦の前後左右に現れる回天を自撃
しているからである。回天は全速で一
分間に千米を走り、命中しなければ反
転、浮上して、再び突撃する。駆逐艦
のほうもぐるぐる走り回ったであろう
から、あちらこちらに見えて当然であ
ろう。

戦史研究家の一部は今でも「回天が
六・七隻で同艦を協同攻撃した」と信
じている。その点、伊58が魚雷で撃沈
した重巡洋艦「インディアナポリス」
を回天が沈めたと言っている人が
いるのと同じである。このときは乗艇
待機している搭乗員が催促しても、艦
長が回天を出さなかった。

事実は勝山中尉ひとりの大奮闘だっ
たのである。そして、誰が挙げた戦果
であるかを確定できる、回天では唯一

のケースとなった。飛行機特攻でも操
縦者の名前と戦果が結びついた例は少
ないと思われる。

勝山中尉には、八丈島へ出撃する私
の後任として大津島での職務を引き継
いで貰ったが、いかにも水戸ッポ、勝
気であるが実に純情で、人に愛される
明るい人物であった。

勝山淳中尉（没後少佐）はあの戦局
のもと最も価値ある若人を代表する一
人であったと言えるであろう。



伊47潜 天武隊 20.4.20光基地

加賀谷 武

略歴 樺太、海兵71期、第一特別基地隊大津島分遣隊。回天特別攻撃隊金剛隊伊36潜で出撃、昭和20年1月12日、ウルシー環礁内の敵艦隊を攻撃、戦死。

加賀谷武中尉(当時階級)は海軍潜水学校第11期普通科学生の卒業に際し昭和19年8月15日付で第一特別基地隊附の発令を受けて回天搭乗員となり9月1日に開隊した同大津島分遣隊に着任された。

訓練開始2日目の9月6日夕刻、天候の悪化するなか徳山湾内の操縦訓練に出発した回天が海底に突入、行方不明となって、操縦の樋口孝大尉と同乗の黒木博司大尉、すなわち最上級搭乗員の2人が殉職されるという大事故が発生、回天隊のスタートはまことに壮絶であった。

使命感に満ち、清新な緊張感が日夜漲っている回天隊にあって、加賀谷中尉は穏やかで、いつも微笑を絶やさず、春風胎動とした感じであった。大津島基地では、その点で異色の存在であり、特に同期の仁科中尉とはすべてに対照的であった。威厳よりも親しみの人で

あり、ときには暢気そうに見える雰囲気、あたたかさは貴重であり、ありがたかった。

指揮官板倉光馬少佐が戦後出された著書に、加賀谷中尉の面目躍如という光景が述べられている。引用すると、

「訓練的を見失った監視艇から無線連絡がはいり、搜索艇をくり出したが、杳として消息がわからない。さては黒木と樋口の二の舞かと、騒然となったが、当日は海面が平静で、海底突入の事故は考えられない。念のため、浮上点付近を潜水夫でさぐらせたところ、海底に沈坐していた。おまけに、待ちあぐんだ操縦員は、応急用のウイスキーに酔っぱらって、引き揚げたときは高躍有名になったのは、このときからである」

19年12月1日進級して加賀谷大尉となられ30日、金剛隊伊号第36潜水艦で出撃されたが、同艦の回天搭乗員4人はいづれも情に厚く、乗員たちに慕われていたと聞く。寺本巖艦長は、わずかな期間ながら印象が深かったと見えて「よほど胆ができていたと見える」と、加賀谷大尉を評しておられる。

当時の先任搭乗員であった加賀谷大尉が乗り込まれた伊36潜は12月30日に大津島を離れ、敵の大艦隊が集結する

ウルシー島の泊地攻撃に向かった。各艦の攻撃日を、伊48潜のほかは20年1月12日と決定された。この日未明、伊36潜はウルシー環礁の北西水道西方6.5哩の地点から4基の搭載回天を発進させた。最初に加賀谷大尉の艇が〇三四二順調に発進してゆき、予想時刻に4回の大爆発音を潜水艦が聴取している。

それらの戦果は、今なおすべてが明らかになってはいないが、弾薬輸送艦の「マザマ」五四五〇トンが、回天が艦底の下を通り過ぎたのちに爆発し、そのため轟沈こそしなかったが大破して、多数の死傷者を出した。このほかに、揚陸船LCI-600号が沈没したと、それぞれ報告がある。

第六艦隊は金剛隊伊36潜の挙げた戦果を「有力艦船4隻轟沈」と認定し、

紀元節の2月11日、豊田副武連合艦隊司令長官より金剛隊に対し感状が授与され搭乗員は二階級特進の栄を受けた。回天の搭乗員たちは、国民と国土を護るため、これが一人の若人が採りうる最善の道と考えて、夫々にはかけがえない命を進んで捧げた。彼らの心の中には突きつめた愛国の至情とともに、大津島での日常に見るとおり、自らの能力を最大限に発揮する日を待つ明るさがあり、結構らしく過ごしていた。

その要素の典型的な体現者として加賀谷武中尉が回天隊におられ、元氣明朗な雰囲気源となっておられた。今あらためて中佐の、別な形のリーダーシップへの認識を深め、あたたかい人柄を偲ぶ次第である。



ウルシー泊地で回天の攻撃で炎上する油送艦「ミシシネフ」

林 義明

略歴 新潟県。甲13期予科練出身。回天搭乗員。一等飛行兵曹。平生基地から回天特攻多聞隊伊58潜で出撃し敵水上機母艦に向けて発進、回天最後の突撃を行い戦死。海軍少尉

台湾の台南第一中学校から第13期甲種飛行予科練習生に進んだ彼は、卒業のとき志願して回天搭乗員となった。

光と平生の基地で訓練を積んだ上、回天特別攻撃隊多聞隊の伊号第58潜水艦で、平生では最初の出撃搭乗員として昭和20年7月18日出撃、沖繩パラオ間の敵輸送航路の攻撃に向かった。

同潜水艦は7月28日会敵し回天二基を発進させた。29日の深夜、重巡洋艦「インディアナポリス」を魚雷で撃沈、そのあと回天は8月10日、敵船団へ二基が発進したが、このとき林艇は機械不調のため発進中止となった。

8月12日水上機母艦らしい大型艦を認め、残るただ一基の動ける回天、三号艇の林義明一飛曹が勇躍これに向かって発進した。

相手はドック型の上陸用舟艇母艦「オークヒル」であった。後方から迫ってくる潜望鏡を発見して速力を一杯に

上げ、左右に転舵して懸命に逃げ回る間に、護衛していた駆逐艦が回天に向かって突進した。

林艇はこの駆逐艦「トーマス・ニックル」に目標を転換して突撃、命中した。駆逐艦の乗員は艦の横腹を「ゴリゴリ」と擦ってゆく異様な音響を聞いている。しかし回天はこのとき爆発せず、少し離れてから大爆発を起した。駆逐艦はその衝撃で片方のエンジンが使えなくなった。

敵の大型揚陸艦と駆逐艦は、林艇が爆発して真っ白な海水の柱が高く立ちのぼった後もなお二、三基の回天が攻撃中と思ひ込み、恐怖心から波がしらを見誤るのか、何度も「潜望鏡を発見」「雷跡を発見」しては転舵、回避を繰り返し、爆雷を投下した。とうとう更に一時間にも及ぶ「幻の回天」との交戦を続け、同艦隊は戦闘報告に「二時間にもわたり人間魚雷と戦闘し、その二隻を撃沈した」と、半分が空振りであったとも気づかず得々と奮戦記を書いている。

終戦を三日後に控えての、これが大東亜戦争における回天の最後の戦闘になった。頭部の慣性信管が作動しなかったのは、回天が艦腹に撃突した角度が浅かったためと思われるが、もし搭乗員がその瞬間に手動の起爆スイッチを

押していたら、駆逐艦は間違いなく轟沈である。問一髪のところでも大きな痛恨で無念は、我々にとっても大きな痛恨である。しかし、林艇の見事な奮戦ぶり、彼の不撓不屈の攻撃精神を具現したものであり、まさしく洋上の波濤のなかにおける回天の航行艦襲撃の能力を立証した大健闘であった。

誠実、真摯な人柄で筋骨も逞しい偉丈夫、故・林義明少尉は我々の誇りとするに足る模範的な回天搭乗員であった。



多聞隊後列左から3人目林1飛曹



回天1型3号艇 天津島魚雷発射場内の水面にクレーンで吊下げるところ

久住 宏

略歴 埼玉県、海兵72期、回天搭乗員。回天特攻金剛隊伊53潜でバラオ島敵艦船攻撃に向かったが発進の際、気筒爆破の事故に遭って自沈。

久住宏少佐は東京府立九中から海軍兵学校に進み、巡洋艦多摩乗組を経て潜水学校11期普通科学生となり、19年8月卒業した。この時期、特攻の気運はまだなく、極秘の人間魚雷を知る人は潜水学校でも稀であったのに、どうして知ったのか強硬にこの必死兵器への配属を志望し、潜水学校を卒業した兵学校72期生ではただひとりの回天搭乗員となって、開設されたばかりの訓練基地大津島に着任した。

彼は川越市の素封家の生まれで人柄がよく温厚であるが、至って朗らかな話しぶりで、「おっとり」としているが、生まれが東京に近いぶん、江戸っ子だな」と私は思っていた。陰のない正義感と使命に徹する責任感に溢れ、名譽も利益も一切顧みない人物と見たが、次の遺詠にもあるとおり、彼は命よりも名を重んじ、さらに名を挙げることもよりの固の一礫石に徹することが念願であったようである。

命より なお断ちがたき ますらをの
名をも水泡と いまはずてゆく

彼は出撃前の或るとき「万が一、命中できないまま燃料が切れた場合、俺は浮流機雷となって敵を待ち、命ある限り最後まで戦う」と私に語ったことがある。「動けなくなったら深く自爆」の発想を超えていた。

回天特別攻撃隊金剛隊の伊号第53潜水艦で、久住少佐は回天四基の先任搭乗員としてバラオ水域の敵艦隊攻撃に向かった。昭和20年の元日を太平洋上で迎えたのち1月12日の夜明け、コッソル水道の沖合から湾口に向かって発進したが、直後に気筒爆破が発生する不運に見舞われた。艇は海面に浮び上がり、五分後に沈んだ。

少佐は自艇後部の推進機関に事故が発生したことを知り、直ちにあらゆる処置を当たったであろう。しかし航行不能を確認すると、五分間隔で相次いで発進して来る後続艇の行動を妨げないよう、また浮上したまま漂流し敵に発見されて作戦を暴露することを恐れ、さらには母潜水艦が彼を救出しようとして、或いは敵前で浮上し危機に陥ることのないよう、これが最善の処置と決断、自ら艇内に水を入れて、やるか

たない無念を抑え従容として沈んで行ったものと思われる。

少佐の性格から当然に推察される沈着冷静な思慮の上に立った自己犠牲の行動である。このあと久家稔大尉が艇内に悪ガスが発生して尖神、発進不能となったとき、母潜は敵前で危険を冒して浮上し彼を収容した。しかし、既に艇を離れたあとの久住艇の場合、若しも救出を試みれば潜水艦の自殺になったであろう。

御両親あての遺書の最後には、「願わくは君が代守る無名の防人として、南溟の海深く安らかに眠りたく存じ居り候」と記されている。



金剛隊伊53潜出撃にあたり訓示を受ける久住中尉ら



伊53潜上の金剛隊員、左から久住中尉、伊東少尉、久家少尉、有森上尉

沖繩摩文仁台上の 義烈空挺隊碑前祭

—それは縁ある自衛隊員の手で
行はれている—

田中賢一

摩文仁台上に「義烈」と刻んだ臥牛
のような大きな碑を建てたのは、昭和
51年のことである。この石は発進飛行
場である熊本健軍の西に聳える金峰山

から掘出して運び込み、奥山隊長の遺
書にある「義烈」の二字を拡大して刻
んだ。昭和51年5月24日、義烈突入の
日に因んでこの日に除幕式を行った。

そのときは遺族五十余名、戦友約百名、
自衛隊空挺隊員約五十名、それに地元
の有力者も多数加わり、盛大な除幕式
を行った。戦友の中には当時衆議院副
議長だった園田直代議員も含まれてい
た。爾来5月24日になるべく近い日曜
日に、空挺同志会沖繩支部主催で碑前
祭を行うことになっている。

沖繩には元落下傘部隊員だった者が
三人いたが、皆故人となつてしまい、
現在の支部構成員は、習志野にある自
衛隊空挺部隊隊員で、沖繩の自衛隊に
転属した現職自衛官、及び除隊し沖繩
に居住している者、併せて四〇名許り
で構成している。碑を建ててから三三

年、昔の落下傘部隊の戦友も追々残り
少くなり、それに遠隔地の為毎年の参
加者は少くなり、時には皆無のことも
あった。

ところで本年の碑前祭は現職自衛隊
員の都合で5月15日に行はれた。県外
から参加した者は、昔の戦友二名と習
志野の自衛隊空挺隊長以下四名だった。
そのほかはすべて沖繩支部、即ち現職
の自衛隊員とその退職者である。

義烈の御霊に捧げる辞 田中賢一
往時茫茫 義烈特攻烈士の国に殉ぜら
れしより五十四年を経ぬ 臉に浮ぶ諸
士は 明眸皓齒勇姿凛々たるに 残り
し者既に老衰 嘗て共に抱きし志 失
はざらめと思えど 空しく醜体を世に
暴すのみ

義烈百十三柱の御霊よ 諸士が敗色濃
き沖繩に 欣然として向はれしは 後
に続く者ある信ずればなるべし 然る
に何ぞ 国敗れし後 東京裁判史観に
汚染せられし国民 就中政府要路に在
る者の国を思うの情 特攻烈士と隔る
こと甚しく 靖国の英霊を祭ることす
ら絶えて久し

我等諸士の遺香を継ぎ 世の教導に努
め来りしも 微力にして此の如し 然
れども安んぜられよ ここに連なる自
衛隊員は 空挺隊の防人にして 諸士
の負担に応うるものと信ず

我等世に語り部として生き長らえあり
しも 諸士と黄泉に会うときも遠から
じ ここ摩文仁台上の碑は永遠にして
義烈の文字は後世の人に訴うことある
べし 安んじて蓋鎮まり給え
最後に腰折二首を捧ぐ

続くものありと思えばもののふの
道ひたすらにかけしをのこら
をのこらの残せし思い後の世に
語り伝うる 島の石ぶみ



かつての北飛行場跡、その一隅に義烈玉
砕の地という標柱が建っている



義烈空挺隊員の遺墨に思う①

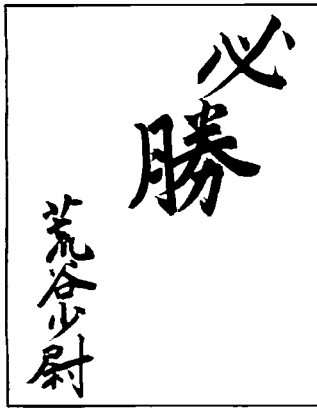
田中賢一

ここに義烈空挺隊員の遺墨がある。それは一枚の紙に一人づつ書いたものもあれば、大勢の寄書きもある。改まって遺書と銘打って書いたものではないので、かえって常日頃抱いていた気持ち

が滲み出ているように思う。今回は第三独立飛行隊の陸士57期五名の人達ものを紹介しよう。説明の代りに健軍飛行場に出撃を見送った中村勇大佐の手記を転載する。この人は奥山隊の母隊である第一挺進団の団長で、義烈空挺隊とは指揮関係はなかったが、健軍に向いて出撃準備の指導に任じた。遺墨や遺品が現存するものこの人に負うところが大きい。



荒谷 猛



隊員達は搭乗前の寸刻を思い思いのグループに分かれて最後の歓談に花を咲かせている。隊長機の前にも、奥山道郎(53期三重)、諏訪部忠一(54期神奈川)、渡部利夫(55期秋田)、町田一郎(56期群馬)、小林貞吾(57期新潟)、新妻幸雄(57期東京)、荒谷猛(57期佐賀)、川守田啓志(57期青森)、酒井義男(57期東京)などの顔見知りの一団が無心に笑い興じてる。陸軍士官学校の同窓生達が最後の同窓会をしているようだ。その大部分である56期57期は私が陸軍予科士官学校で教育したことのある生徒である。(编者註中村大佐は以前予科士官学校生徒隊中隊長を勤めたことがある)他愛のない話題につり込まれて、いつの間にか仲間入りしていた。

その時同盟通信の記者たちも仲間入りだ。



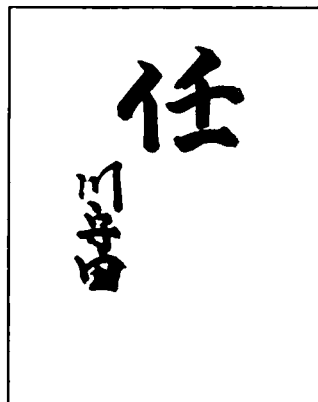
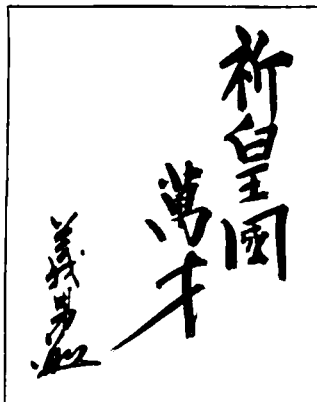
酒井 義男



川守田 啓志

暫くしてからのことである。若い一人の記者が大きな声で「小林さん浜松に伝言ありませんか!」といった。同僚との話で夢中な小林中尉より、耳さとくこれ聞きつけた一人が「オーイー!小林!〇〇ちゃんに遺言がないかと聞いているぜ!」と肩を打たれて、「なに!」と無心にこちらを向いた視線に、顔なじみの若い記者が手を上げた。腕白小僧が忘れ物を思い出したと

の談笑はいよいよ弾んでゆく。18時10分、奥山隊長の「全員搭乗!」の令で各搭乗機に向って駈歩で分進



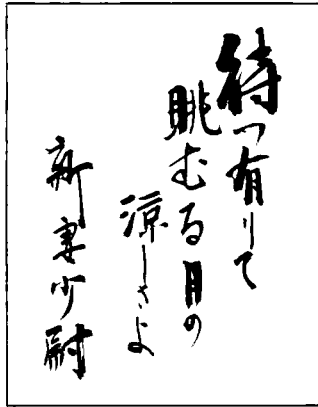
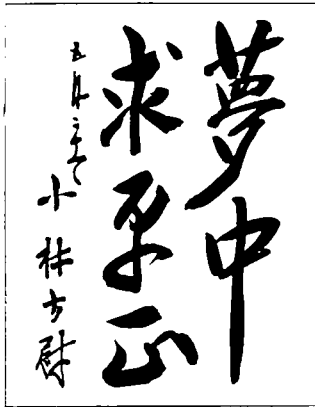


小林 真吾



新妻 幸雄

してゆく、その足さばきの軽快さ。遊
びに夢中で陽の暮れるのも気付かずに
いた腕白たちが、ふと気がついて良寛
和尚を置き去りにして行ってしまった
のだ”以上中村大佐の手記
下の写真正面が中村大佐、奥山隊長
が地上戦闘の計画を説明しているところ。



特攻殉国之碑慰霊祭

小 灘 利 春

第三三回の「特攻殉国之碑慰霊祭」
が、長崎県佐世保市ハウステンボスの
隣町、東彼杵郡川棚町の新谷郷で、5
月9日(一)より厳粛に執行された。

昭和19年8月、大村湾に臨むこの地
に臨時魚雷艇訓練所がおかれて、魚雷
艇隊の訓練を実施し、また戦局の急迫
に応じて集まった数万の若人を訓練し
て、特攻部隊の一―三隊にも及ぶ震洋
隊、一部の伏龍隊を編成したほか、回
天、蛟龍など水中特攻兵器搭乗員の基
礎教育を行った。

当地で訓練を受けて戦没したこれら
隊員を顕彰するため、有志と元隊員に
よってこの碑を建立、昭和42年5月の
海軍記念日に除幕されて以来、毎年5
月の第二日曜日に「特攻殉国之碑保存
会」が主催して、慰霊祭をこの碑の前
で開催している。地元川棚の町を挙げ
ての積極的な協力が、長く続いている
この式典の大きな支えと見受けられた。
ご遺族が多数出席され、来賓、地元
有志の参加も多く、約三百人が参列し
た。この時期、雨に見舞われることが
多いとのことであるが、本年は好天に
恵まれ、軍艦旗掲揚、君が代斉唱に始
まる慰霊の式典が明るい雰囲気のもと

に整然と進められた。

純白の制服に身を固めた海上自衛隊
の各隊司令が献花、拝礼を行った。碑
の前に整列した儀仗兵が、佐世保音楽
隊の奏楽のなか一斉に発射する三回の
弔銃が響きわたり、感動が一段と深ま
るのを見た。

次の慰霊祭開催は平成12年5月14日
であるが、五年毎の大祭にあたるので一
層盛大な式典になるものと思われる。



神風特別攻撃隊第十九金剛隊

福山正通少佐の出撃

飯野伴七

金剛隊編成の背景と経緯

昭和19年10月20日神風特別攻撃隊の命名が行はれ、21日より突撃が始った。25日には空母他の艦船撃沈破の戦果を揚げた。そして在比の戦闘機艦爆が次々とこれに続いた。11月中旬には敵が指向して来るのは中比以北である事が明らかになりつつあった。即ち11月10日大本営海軍部が入手した情報は、「ウルシー・マリアナ方面に有力艦船集中しあり、通信活発にして大攻略作戦開始の疑いあり、20日前後警戒を要す、指向方向は中比以北」というものであった。

一方在比島の福留中将は16日前記海軍部の判断に対し「中比以北に新攻略作戦の場合(船団10隻と仮定) 海陸合せ約300機の協力あれば、機動空母を制圧撃破しつつ船団を潰滅し得る算あり。航空兵力の急速増強を、非常措置を以て促進する要ありと認む」との意見具申電を軍令部次長と聯合艦隊参謀長宛に打電している。

これに対し大西中将は、首席参謀猪口力平大佐を帯同して18日夕刻入京し

た。目的は福留中将の前記具申電を具現化するためであった。大西中将は日吉の聯合艦隊司令部をたずね豊田大將に会い、情況報告の後同夜軍令部に出頭し、及川軍令部総長以下関係者に意見具申した。その主旨は第14聯合航空隊(台湾)の戦闘機と艦爆で計50機の抽出が可能である事を例にあげ、これからすれば練習航空隊から全部で200機位は抽出できるのではないかと胸算用し、これを敵の来攻時までには北部台湾に伏勢待機させておくという自己の考えをのべた。大西中将はまたここ一〜二週間が重大時期である旨を述べた。

この大西中将の提案をうけて、海軍部源田参謀が翌11月19日航空本部、海軍省人事局の関係者と打合せている。結果は内地教育隊から教育を一時停止するならば、零戦・99艦爆・97艦攻等180機の抽出可能の見込であるとの言質を得たので、最終的に軍令部と海軍省が協議して「零戦特攻隊180機を抽出する事」が短時日のうちに決定したのである。

大本営海軍部は同日海軍次官と軍令部次長の連名で聯合艦隊司令長官、第一聯合基地航空部隊指揮官及び練習航空隊司令官に次のように通知した。

「大兵力(神雷部隊)現地進出迄北比方面に対する敵の新攻略作戦に備へ、11月20日付第20海軍航空隊へ艦戦特攻隊180機増強せられたり。右兵力は練習航空隊教官教員及教育用機材、14聯空(台南、高雄空)40機、筑波空30機、元山空30機、大村空20機を以て編成せられたるものにして、爆装工事実施後11月末迄に台湾方面に進出可能の見込みなり。尚大兵力進出後は右兵力は原隊に復帰せしめらるる予定」

(大海機密第二〇二三五一番出)
右の兵力は12月4日以降新竹、高雄、台南の所定基地に分散進出、5日の時点で台湾に勢ぞろいした兵力は97機であった。

福山正通少佐の航跡

福山正通は大正12年奈良県山辺郡山添村に生れ、奈良中学から海兵72期生として昭和15年12月江田島海軍兵学校に入校、同18年9月卒業と同時に同期生306名と共に41期飛行学生を拝命し、霞浦航空隊へ入隊した。約6ヶ月間の練習機(赤トンボ)教程を終へ、引続き5ヶ月間の実用機教程に入った。茲で偵察、戦斗、艦爆、艦攻等各専門科に別れた。福山は戦斗機専修となり茨城県の神ノ池空で実用機教程を修業した。昭和19年7月すべての飛行学生教程を終了し、第一線配備となった。福

山は直に期友6名と共に元山空に配属となり、9月15日には中尉に進級した。元山空は練習航空隊であった。福山は元山空着任と同時に教官配置についてから、僅かに四ヶ月にも満たないのに重大な命令が下る。即ち11月20日空付、金剛特攻隊員の拝命である。その背景経緯については前述の通りで、金剛隊は練習航空隊の練成途中の予備学生13期生を中核としてその教官、教員、一部練習生も加へ各地の航空隊で編成され、第1から第30金剛隊が命名された。海軍航空部隊中樞が乾坤一擲の特攻作戦に福山中尉(当時)は第19金剛隊々長として選ばれたのである。

福山中尉機 元山空を発つ

福山は身の回り品を整理して不用品はすべて母親の許へ送った。11月22日付で左記手紙を書き、24日にはもう愛機零戦を駆って二度と還らざる思出深い元山空を離陸して、内地經由進出地台南へ向った。大西中将が海軍中央部に話を持ち込んでから僅か6日目の事である。時は激しく歴史の駒を進めつつあった。

第一線出撃命令をうけて

福山より母上宛手紙

拝啓 向寒の候母上様には益々御健かにお暮しの御事と推察仕候

大東亜戦争日を追いて熾烈の度を加へ時局愈々重大なるの秋「正通」も出征の恩典に浴し近く第一線に赴く事と相成り申候

顧みれば今日に至る迄何一つとてお心を安んずる事なく御無理許りお願ひ致し私不孝の段御許被下度
父上にも一年間というもの消息なく私出撃の上は御淋しき御事と推察仕候ふも淑子、久美、正昭も居る事なれば御心強く御拜しの程祈上候

私出撃の上は母上様の御期待に背かざる立派なる働きを致し父上と共に御国の為に盡す所存に之有候へば何卒御休心被下度候
不用荷物及軍刀返送致候間若し秘のもの残存せるものあらば焼却被致度。

当航空隊在隊中は司令を始め皆々様に厚く御厄介に相成り申候御礼状出され度
愈々御自重御自愛の程遥かに祈上候
昭和十九年十一月二十二日

母上様
正通 拜
元山航空隊司令
海軍少将 藤原喜代間

福山中尉機 岩国空に立寄る
昭和十九年11月24日夕刻福山は数機の列機を率いて岩国空に降りたった。岩

岩国空には防空編成の同期生林他8名が居た。早速当夜は士官室で福山中尉の壮途を励ます為にクラス会が開かれた。席上「俺は特攻隊だよ」と福山が自分の任務を明かにした。

福山になんと声をかけてよいのか分からぬので福山の応待は専ら先任の林にまかせきりだった。何れ俺達も征かねばならぬだろうが運命の日がヒタヒタと迫ってくるのを感じた(クラス)

確かに福山は俺の部屋で泊った。しかしとり立てて話もなく、専ら飛行学生時代の話をしたが彼は淡々として居た。ソファーに寝そべったりして(林)生存のクラスは三人三様に回顧して話して居る。

福山は翌日11月25日付で岩国から母上宛に巻紙に墨書した達筆の遺書を出している。差出人の所は「山口県玖珂郡岩国町大明小路 森本準治」と印刷してある封筒を使用しており、森本準治を一本線を引いて消し、横に福山正通と書いて出している。森本準治とは岩国空の士官がよく使って居たクラブの主人名である。福山は岩国に着いた翌日25日に、森本氏経営のクラブの多分離れの日本間で気分を静め、特攻隊として死に臨む決意を固めたものと思はれる。

当初林中尉の部屋で遺書を書いたと聞いていたが、林によれば確かに時間をかけて何かを書いていたのを覚えていた。だからわざと席を外したりしたが、墨書していた様には見えなかったという。福山は隊外の前記クラブで毛筆墨書で遺書を認め、直接母上宛送ったのである。

拝啓 三歳前米英に対し大事の御事催され候に附ては日を追いて戦果を拡張し皇威を宣揚今日に及びたるも敵は物量を頼み反撃を加へ来り愈々危急存亡の秋と相成り申候。

此の秋に当り予て熱望の第一線出撃の恩命に浴し近く出征することと相成正通は勇躍出征仕候
二十有余年の御養育厚く御礼申上候何等母上様には報い奉ることなく相済まぬ次第に之有候も一死奉公の御事を以て御恩の万分の一にも報い

奉る所存に之有候
正昭にはよく勉強立派なる人間に如く御伝え被下度 後れて御便りする機もなきかと思はれ候へば 祖母様増田の祖父母様、伯父母様にも宜敷願上候 先は取り急ぎお別れ如此御座候最後に母上様を始め皆様末長く御栄への程祈上げ候 敬具

昭和十九年十一月二十五日 正通 拜
御母上様



金剛隊の突入によって燃える戦車揚陸艦

後に続くを信ずと言つて
散華した特攻隊員に我等
何と応えればよいのか

田中賢一
後に続くを信ずとは、ガダルカナル

で戦死した38師団28聯隊の若林中隊長の言い残した言葉であるが、特攻隊員の遺書にも言い廻しは違っているが、同じような意味の言葉が少くない。たとえ自分が一機をもって一艦を屠ったところで、それだけでこの戦に勝てるとは思えない、後に陸統として若人が続けばこそ、頽勢を挽回できるのだと思つていた。

第26振武隊永島福次郎少尉(特操一)は20年6月21日都城西を発進、沖繩近海の敵艦に突入したが、次のように書き残している。

一、私ハ大日本ノ天壤無窮ヲ信ズ
一、私ハ沖繩決戦ノ確勝ヲ信ズ
一、私ハ特攻隊ノ陸統タル事ヲ信ズ
同じく第61振武隊の山本隆幸伍長(少飛15)は5月11日に突撃したが、

「皇国の必勝を信じ」

只今より出撃 武運を祈り
後に続くを信ず」と認めている。

また後に続くことを弟に求めた人もいる。島澄夫少尉(予備学生14)は「達夫・広昭、俺は一足先にゆく。二

人とも早晚後に続く事を信ず、二人の来るのを靖国神社で首をながくして待つているぞ」

義烈空挺隊長奥山道郎大尉は弟宛の遺書に「――散る桜残る桜も散る桜兄に後統望む」。

この言葉は同隊でよく言われたらしい。尾身勢二曹長は書き残している。

征くも残るも皆桜
時こそ違え散る桜

散華した特攻隊員の悲願も空しく国は敗れてしまった。世の変りようは驚くばかり、お国の為に死んだのに、国はそのお祭りさへもやらないような世の中になってしまった。

かくばかりみにくき国となりたれば
ささげし人のただに惜しまる
ある御遺族の作だと聞くが、まことに身につまされる思いがする。

一見平和なような我が国に於て、後に続くと信じて征かれた英霊に対し、我々は今何をすればよいのか。それは特攻隊員の抱いていた精神を正しく後世に伝えることである。慰霊というよりも、むしろ顕彰である。学校教育が現在のような態たらく、我々は直接国民に向つてその事をなさねばならぬ。

その方法にはいくつかある。先ず文書を媒体とするものがある。特攻隊に

関する書物を世に出すこと、今般我が協会の特攻隊員遺詠集を出すのもその一つである。この会報もそうであるが、何としても発行部数が少く普及率が低い。それに有料となると購読する者は既に心を寄せている人で、新人の教化とはならないかも知れぬ。今の若い者は文書をじっくり読むことをしない傾向があるので、先般協会が出した特攻隊のビデオなど有効だと思ふ。

書物やビデオ等は長い目でみれば一過性のもので、金石に刻んだものは永遠である。協会では此の度靖国神社遊就館前に特攻隊員の像を建てたが、像は未永く訪れる人に話かけている。特攻隊に係る慰霊碑は全国に沢山ある。

平成二年に我が協会の前身である特攻隊慰霊顕彰会では「特別攻撃隊」という本を出したが、その中には当時掌握した75基について紹介しているが、その後更に増加したことであろう。これらの碑で大切なことはその碑文である。

碑文は後世に戦没特攻隊員の精神を伝えるものでなければならぬ。

沖繩摩文仁慰霊公園の一番高い処に義烈空挺隊の碑がある。その碑文には義烈空挺隊の活躍を述べた後、後二続ク者ヲ信ジ日本民族守護ノ礎石トナリシ将兵ノ霊ニ我等何ヲモッテ応エントスルヤ」と参拝する人に語りかけてい

る。時代が移り、特攻隊に関する認識が薄れゆく時代に備え、今後建立するものがあれが、碑文は十分に意を尽し後世に教えるものでなければならぬ。

戦友会連合会の人達は、英霊にこたえる会東京都本部の構成員として、毎月何回も靖国神社参道で公式参拝の実現を訴え続けており、我が協会の画伯達の特攻隊を始めとし御祭神に因む絵や書をその横に展示し、参拝者に訴えている。靖国神社に参拝しない人(総

理大臣もその一人)に訴えることはできないものかと思ふ。

我が協会の松本武仁、中江仁の御両人は、毎月一回若い人の勉強会を主催している。これは正しい歴史観を培うもので、特攻隊のこともその中に出ており、参加者の真摯な心情には敬服する。自由主義史観研究会の傘下にもこのような組織があるので、我々は手を携えて進むべきである。

我々の属する戦友会では毎年のように慰霊祭をやり、我が協会でも春秋二回合同の慰霊祭を行っているが、老兵が集つて懐旧の思いに浸るだけでは、進歩がない。若い人に呼かけ参加を求めすることに努力せねばならぬ。

我々の持時間はあと僅かである。あせらざるを得ない。

特攻隊鎮魂歌と

歌手一愛(にのまえあい)

去る4月2日、歌手一愛は初めて特攻隊戦没者合同追悼式に参列し、その後の懇親会席上で鎮魂歌『雲のうっし絵』を歌いましたが、その時の模様を彼女は次のように述べています。

——4月2日には、第20回特攻隊合同追悼式に参加させて頂きました。靖国神社での追悼式に、元特攻隊員の方やご遺族の方々と共に私も参列、本殿にて参拝し、改めて特攻隊の方々の犠牲によって今の日本の平和がある事を考えさせられました。

懇親会ではご参列者の方々に見守られる中、デビュー曲『雲のうっし絵』と『道しるべ』を歌い、涙を流して聞いて下さるご遺族の方々を見て、私も涙をこらえるのに必死でした。また歌い終ったあと、一人の元特攻隊員の方が『僕たちの世代で特攻隊の事はもう忘れ去られてしまうと思っていた……。でも君のように若い人がこのような曲を歌い、語り継いでくれてありがとう。本当にありがとう。』と涙を流しながら話して下さいました。

皆様の暖かい支援、本当に嬉しかったです。そしてこの歌を大切に歌い続けていこうと強く心に誓いました。

彼女は5月3日の知覧における慰霊祭にも参加しております。

23才の若い女性歌手が54年前散華された若き戦士に対し清純なる歌を捧げてくれたことに心から感謝し、我が協会の趣旨にも副うものと嬉しく思います。

これからも彼女は歌い続けることを約束されております。我々もこれに応えて彼女、一愛を支援して行こうと思

います。会員諸賢のご賛同を
(平成11年5月10日記 小林忠彦)

雲のうっし絵

いいえ、死ぬのじゃ ありません

母さんあなたの その胸に

僕は帰って 行くのです

どうか涙を 見せないで

ミヤマキリシマ 咲くふるさとの

山こえ 野こえ 海こえて

炎の雨を くぐります くぐります

こんど生まれて くる時は

母さんあなたが 夕焼けで

僕は一羽の かもめどり

空を一緒に 飛びましょう

ミヤマキリシマ 咲くふるさとの

かわいい妹 弟の

多幸祈り 飛びましょう 飛びましょう

多幸祈り 飛びましょう 飛びましょう

水は輝き みどりは萌える
この島々を 守るのが
若者たちの つとめです つとめです

作詞・星野哲郎
作曲・竜崎孝路
編曲・竜崎孝路

道しるべ

花が咲くのに 咲かせもせず

南の風が 潮を吹く

時は止まって そのまま十九

母の黒髪 ま白に染めて

雲の彼方へ 飛び去った

あれが花だと 人は言うけど

雲の墓標に 刻まれた

詩は虚しく 空をゆきかう

雲の谷間で 叫んだらう

愛しているよ 母さんと

時は止まって そのまま十九

行きて帰らぬ 開聞岳の

空はみどりに 晴れわたり

何も無き如 蝉は唄えど

神にささげた 雄魂は

山をゆるがし 海を泣かせる

時は止まって そのまま十九

行きて帰らぬ 開聞岳の

空はみどりに 晴れわたり
何も無き如 蝉は唄えど
神にささげた 雄魂は
山をゆるがし 海を泣かせる



知覧にて

特攻隊合同追悼式にて熱唱

「偕行」連載本土防空作戦より

(執筆 辻 秀雄)

決号作戦(本土決戦)における 陸軍航空の特攻作戦準備

〔各航空軍の作戦準備地域〕

第一総軍と第二総軍の作戦地域は、
おおむね鈴鹿山系の線であった。

航空総軍は4月15日第一、第六両航
空軍の作戦準備地域を定めるに当たり、
第六航空軍が沖縄作戦に専念中である
ことを考え、第一、第二総軍の作戦地
域に拘らず、第一航空軍の作戦準備地
域を四国西岸及び中部軍管区を連ねる
線以東の本州とした。このようにして

第六航空軍の決号作戦の負担を軽減し
たのである。なお防空飛行師団に対し
ては、地上総軍の指揮下において防空
任務に服する傍ら、第一又は第六航空
軍の指揮を受けて決号作戦準備を行な
わせることにした。

5月8日第五航空軍主力の朝鮮方面
移動の発令に伴ない、それまで同方面
の決号航空作戦準備に任じていた第53
航空師団は同航空軍の隷下に編入され、

これに伴ない朝鮮方
面の決号航空作戦準
備は、第五航空軍の
担任になった。

5月8日航空総軍
はまた、第一、第六
両航空軍の作戦準備
地域を更改し、おお
むね鈴鹿山系の線を

もってその地域とした。このとき、四
国方面の決号航空作戦準備を促進する
為、明野教導飛行師団を同方面に推進
させた。

なお第六航空軍は沖縄作戦が山場を
越したと判断された頃の5月28日、聯
合艦隊司令官の作戦指揮を離れた。

〔特攻による輸送船団攻撃を主眼 とする作戦要領の採用〕

航空総軍は決号作戦に当たっては、
敵の本土上陸企図を封殺する為、敵輸
送船団を洋上にて撃滅することを最も
重視した。

敵輸送船団の撃滅はわが航空戦力の
活躍にまたなければならぬのである
が、陸海軍の飛行部隊はレイテ決戦に
既にその主力を消滅しただけでなく、
沖縄作戦に使用可能な最大限が投入さ
れた。従って航空総軍隷下の飛行部隊
の操縦者は技術未熟の者が大半であっ

た。しかし比島作戦開始後、南方から
の石油運送が不可能になった為、操縦
教育が極度に制肘され、操縦者の養成
が困難になった。

また飛行機の生産は、本土空襲の激
化や飛行機工場の分散疎開により、ま
た原料入手困難等の為激減した。航空
戦力の造成はほとんど望み得ないので
あった。

この為航空総軍は決号作戦準備間、
輸送船団を伴わない敵機動部隊に対す
る攻撃や、敵航空基地に対する進攻は
もとより、第一、第二総軍に協同して
行なう本土防空作戦も、その実施に当
たっては適宜限度を律し、敵が上陸を
企図するに際して防空飛行師団も含め
て全軍特攻となつて敵輸送船団の洋上
覆滅に努めることにした。

すなわち航空総軍は決号作戦準備間、
特別攻撃隊をできるだけ多数編成し、
これを秘匿飛行場に配置して敵空襲に
よる被害を局限しようとした。そして
一般作戦飛行部隊については、その使
用を適宜律して兵力温存に努め、飛行
場においては極度に分散、遮蔽して地
上の損害を少なくしようとした。

〔特攻隊の編成〕

(特攻隊の編成、配属)
特攻隊は各航空軍、飛行師団(防空

飛行師団を含む)及び教導飛行師団を
編成担任部隊として編成された。

特攻一隊の構成は六機の可動を確保
する為二機の予備機を付し、操縦者は
重爆が八名のほかは六名である。この
ほかに重爆には一隊当たり二名の機上
機関が、また双発機には二名の機上無
線員がそれぞれ増加配員されていた。
なお各隊には隊長のほか一名の優秀
者を含ませるよう配慮されていた。

4月以降編成された特攻隊数は、次
の通りである。

- 4月 62隊(390機)
 - 5月 132隊(792機)
 - 6月 146隊(876機)
 - 7月 83隊(500機) 予定
 - 8月 83隊(500機) 予定
- 計 506隊(三、〇五七機)

特攻隊の編成に当たり人員、器材は
編成担任部隊が差し出し、ほぼ一カ月
の訓練の後、各航空軍等に配属された。
装備機種別の特攻隊配分状況は次頁の
表の通りである。

この表には、沖縄方面で使用された
特攻隊及び台湾、中国方面に配置され
た特攻隊は含まれていない。従って本
土防衛のための、各時期における各軍
の特攻実戦力をほぼ示すものとみられ
る。八月以降の実戦力は、月を経るご

キー115の試作は中島社で進められ、20年3月5日一号機が完成した。

同機は体当たり特攻機として大量生産を目的とした為、特殊な工作機械を必要とせず、また地方の疎開工場でも容易に製作できる構造とした。また使用期間が極めて短い為、代用材料を徹底的に使用するほか、脚は一回の離陸でことたりる為投下式とし、尾脚はソリ式の簡単なものとした。

同機の最大時速は500軒に達する見込みであったといわれるが、飛行性能は良くなく、乗りこなすのは困難であったようである。

一号機完成直後基本審査を開始し、6月頃実用審査に移ったが、同審査が終らないうちに終戦となった。

キー115は海軍でも「藤花」という名称で使用を予定していた。

(この項「日本陸軍機写真集」エアワールド社による)

〔特攻隊運用の規範〕

(敵機動部隊、輸送船団に関する判断)

特攻隊の運用についてはこれより先19年末頃から、航空総監部が比島における航空特攻攻撃の戦訓を基礎として「航空高級指揮官と号部隊運用ノ参考」の作成に着手し、20年4月関係部隊に印刷配布した。これが特攻隊運用の規

範となったものであり、その用法案出の基礎となった機動部隊等の状況については、次のように判断していた。

すなわち機動部隊は、空母五〜六隻を中心とし、周囲にこれとほぼ同数の戦艦、巡洋艦を配し、更にその外側に十隻の駆逐艦を配する輪型陣である。これは二〜三群が連係をとりながら、ほぼ一八ノットの速度で行動する。20年2月ごろ以降は一群の隻数を半減し、群数を倍加したようである。

機動部隊の索敵能力は優秀であって、50〜100米の超低空で接敵しても距離約40軒で、また中空の三、〇〇〇米で接敵しても約200軒附近でレーダーに捕捉される。機動部隊上空には常に十数機の直掩機があり、防空に任じている。すなわち、超低空で接敵しても突入までに五〜六分間直掩戦闘機の阻止攻撃を受けることになるのである。

直掩機幕を突破すると猛烈な対空火網に阻止される。殊に空母の高射砲はレーダーに直結するものであり、性能が優秀であった。また40耗級の高射砲関砲の火網構成は濃密であった。その装備数は次のように観察されていた。

航空母艦	9	16	16	24	16	24
戦艦	20	72	50			
巡洋艦	8	16	14			

駆逐艦 4 4 4

突入に成功した場合でも、戦艦及び航空母艦の防禦装甲は厚く、その撃沈は困難である。空母の場合は、雷撃又は大・中型特攻機の甲板への命中、大型特攻機の側壁への命中が必要である。戦艦の場合、装甲は格段に厚く、雷撃が大型特攻の甲板命中のほか撃沈困難とみられた。甲板への命中も砲塔、司令塔に触れることなく、甲板中央部に命中しなければ効果は期待できないと見られていた。

輸送船団の防禦力は比較的弱い。攻略兵団の兵力によって輸送船の数は区々であるが、レイテ作戦の場合は、輸送船70及び上陸要舟艇30程度のものが整理とした密集隊形を作り、その周囲をほぼ9隻の駆逐艦ないし巡洋艦が護衛していた。このような群は3群あり、各群の間隔は10〜25軒であった。

この輸送船団には対空掩護の処置がなく、対潜警戒を重点に護衛が実施されている状況であった。

上陸防禦作戦において、陸軍は特攻攻撃の主眼を輸送船団撃滅においた。概述のように輸送船団の防禦力は強力ではなく、突入できれば成功の算が大い。問題は敵機動部隊の我が出撃基地の制圧等によって特攻隊の出撃、突入が困難になることである。しかし、

機動部隊の攻撃は簡単でなく、いたずらに大兵力を消費する虞が大きい。従って陸軍特攻隊の機動部隊攻撃は、輸送船団に関連して進攻する機動部隊に限定された。これならば、たとえ空母を撃沈できなくても、飛行甲板を破壊してその行動を制約できれば目的を達成することができるからである。

(特攻隊運用の要則)

以上の観点から特攻隊運用の要則が次のように示された。

一 目標の選定は作戦上緊要のものに限定し、的確に命ずることが必要である。時には大型上陸用舟艇を選定させることがある。しかし「と」号部隊の素質、好機の捕捉等の観点から、見敵即攻の必要もある。

二 攻撃時機は作戦の焦点において、目標を把握しかつ敵を奇襲し得るよう選定することが必要である。

三 「と」号部隊の攻撃部署は目標の発見、同決定、誘導、掩護、攻撃要領及び戦果確認が確実に実行されるよう処置することが必要である。

四 「と」号部隊の団結維持のため、一隊は同時に使用する。

五 航空基地の完整は、特攻攻撃を成功させる絶対の要件である。飛行場における損害をなくすため、秘匿飛行場

の利用、分散遮蔽、掩護、炎上防止に留意する必要がある。また、航空基地相互の通信運用を適切にし、敵制空、哨戒の間隙を利用して発進できるようにする。

六 特攻部隊編成後長期にわたる場合は精神の修練と寸暇を惜しむ訓練によって戦力の向上を計ることが必要である。

(機動部隊の攻撃要領について)

前述のように機動部隊の攻撃は極めて困難であるから、敵を確実に捕捉し、好機に乗じ必成兵力を使用する必要がある。攻撃に任ずる部隊は大爆弾を装着する優速精鋭部隊であり、掩護戦闘機も爆装する。

(輸送船団の攻撃要領)

輸送船団攻撃は特攻部隊を終結使用し、船団を一挙に撃滅することを主義とした。このため海軍航空との協同攻撃を重視した。敵の機動部隊制圧の間に特攻攻撃を敢行するのであるから、戦機を失っては敵に対応のいとまを与え、成功が困難になる。

しかし輸送船団の攻撃は機動部隊攻撃に優秀部隊を充当するため、技量、機種ともに劣る特攻隊を使用せざるを得ない。以上の観点から輸送船団攻撃要領は次のように定められた。

一 戦闘一戦隊、特攻一〜二隊及び戦果確認機をもって一攻撃隊とし、掩護部隊の長を指揮官とする。特攻機種は一式戦が望ましく、一隊の機数は六機とする。戦果確認は司偵、やむを得なければ軍偵とする。

二 強襲攻撃は攻撃部隊に先立つ5〜10分に制空部隊を発進させ、敵直掩機と戦闘の間に攻撃部隊が突入する。攻撃時機は技術により定めるが、敵を見したら直ちに攻撃し、機を失しないことが必要である。

三 奇襲攻撃の要領は超低空攻撃とする。攻撃部署は直掩、特攻各一機を一組とし、あるいは更に二機を間接掩護とする。敵機と類似の行動をとり、敵の警戒の虚に乗ずるを有利とする場合がある。

(特攻隊戦闘要領の基準)

次に特攻隊の戦闘要領の基準については、次のように示されている。

すなわち、発進は誘導機、間接掩護部隊、直掩部隊次いで特攻部隊である。航進は要すれば迂路をとり、努めて雲、太陽、風向を利用する。航進高度は、強襲の場合は高高度急速接敵、奇襲の場合は超低接敵とする。しかし、特攻機は通常の二倍の弾量を抱えているの

で、大高度をとるのは困難であるし、超低空の場合の速度は遅いのである。従って特攻機の掩護は殊に重要である。直掩機は特攻部隊の前後に配置し、間接掩護部隊は特攻部隊の後上方一、〇〇〇〜一、二〇〇米の高度差を航進するように定められた。

目標を発見したならば、急速に接敵し、あらかじめ示された目標に対し、異高度から一機一艦の突撃を敢行する。高高度接敵の場合、逐次高度を処理しつつ機動し、突撃開始点に占位する。その高度は一、二〇〇〜一、五〇〇米、俯角三五〜四〇度、存速約三〇〇軒/時である。この時の速度と角度が大に過ぎると過速に陥り、操縦不能となって目標に命中し難くなる。目標は煙突と艦橋の中間、空母の場合は昇降機的位置である。

理想の位置に占位し得たとして、目標までの距離は約2軒、突入までの所要時間は10数秒である。その間愛機が火を噴こうと、一部が砲弾で吹き飛ばされようと、加速の浮揚しようとする愛機を押さえて目標に突進する気魄が、この攻撃の成功、不成功の岐路である。

超低空水平攻撃は奇襲、夜間あるいは雲底が低い場合等に採用し、その時の状況で降下または水平攻撃を実施する。攻撃部位は艦の中央、吃水のやや

上方である。この場合の占位諸元は距離3〜4軒で高度800〜一、二〇〇米、存速270〜300軒/時である。目標との距離により降下攻撃となるか、水平攻撃となるかの差が生ずる。

超低空接敵の場合でも占位点上昇して攻撃に移る理由は、目標の確認が容易あることのほか、目標命中の際十分な衝力を保有するためとみられる。

(爆弾による艦船爆撃の効果)

爆弾による艦船爆撃の効果については五〇〇軒以上でなければ軍艦の攻撃には不適當であり、二五〇軒弾では空母の飛行甲板を破壊してこれを制圧するにとどまるとされていた。一般に二五〇軒以下は輸送船攻撃用である。

特攻各機種に装備する爆弾は、重爆では海軍八〇〇軒通常爆弾二発、その他は双発機種(二式複戦を除く)は同一発とされた。各種戦闘機(九七戦、二式単戦を除く)は二五〇軒弾二発装備が通常であった。その他の戦闘機は同一発であり、九五式中練では一〇〇軒装備とされている。また五〇〇軒弾は九九襲、九七戦等に使用されて効果を挙げた。

威力強大な特攻兵器としては、19年5月以降、「タ」弾方式の高温高速ガスにより装甲貫徹をねらう弾種の開発

が進められ、「核弾」と呼ばれた。この直径は二米にも及ぶもので、四式重の胴をふくらませて装着した。その運用は簡単でなく、二〜三機が実用されにすぎない。

〔特攻隊運用の為に航空基地耐久力向上の努力〕

（陸軍中央部の飛行場設定隊、地下施設隊の編成、配属）

特攻攻撃を成功させる為には、飛行場の配置をその運用に適合させ、かつ飛行機を徹底して分散遮蔽するともに、地下施設に収容する等の処置を採り、熾烈なる敵火に対し耐久力を向上させることが必要である。

この為軍中央部は多数の野戦飛行場設定隊（乙編制）を編成して第一、第五及び第六航空軍に配属し、飛行場の耐久力付与や秘匿飛行場の設定等の作業に当たらせた。

また陸軍中央部は2月8日第1〜第10地下施設隊を、4月17日第11〜第20地下施設隊の編成を令し、司令部の地下移行、要地の堅固な地上防衛陣地の構築を急ぐことにした。

地下施設隊の編制は中（少）佐を長とし、二コ中隊、一コ警備隊から成り、総員七六四名である。兵はなるべく陸

道及び坑道関係者を充てるよう示された。装備として特色あるものは六屯牽引車二、自動貨車一二、排土車二などがあり、穿孔機、爆破器材が多く装備されていた。

航空関係の地下施設隊の終戦時における配置は次の如く、その主要な作業は中部以東では飛行機製造工場の地下移行、西日本では特攻基地の強化であった。

第11―倉敷、第12―松山、第13―柏原、第14―宮崎、第15―第16―熊本、第17―那須、第18―第20―岐阜、第19―奈良

（特攻隊、地下施設隊に関する記事は戦史叢書「陸軍航空の軍備と運用」による）

終戦頃における本土の飛行場は陸軍のみで200近くにのぼった。

（第一航空軍の特攻隊用飛行場整備に関する指示）

第一航空軍は決号作戦の作戦計画において飛行場の整備につき次のように細部にわたりの確に指示している。

一 航空基地は「と」号機及び同直掩機の出発に整齐迅速かつ安全ならしむるを主とし秘匿位置、準備位置、誘導路及び秘匿滑走路の設定整備に重点を置く。

二 一飛行場に収容する「と」号部隊は四隊（24機）以内とし、軍作戦準備地域内全飛行場の活用を図る。

三 飛行場は左の二種に区分し、それぞれ目的に応じ整備の万全を期す。

秘匿飛行場、分散、秘匿を主とし遮蔽、掩護を完備する。

出発飛行場 空襲下においても攻撃に出発し得るごとく諸準備を完備する。

四 海岸飛行場にあつては、地下格納式掩体を設け、砲撃下における迅速な出動を容易ならしめる。なお「と」号機戦果確認に万全を期し、沿岸高地に監視哨を配置することも計画されていた。

（第10飛行師団の「と」号機秘匿位置設定に関する命令）

決号航空作戦準備の為、第10、第11及び第12の防空飛行師団は、防空任務遂行の傍ら決号航空作戦準備を行なった。そのうち「と」号機秘匿位置の設定に關し、第10飛行師団は5月7日調布、成増、越ヶ谷、柏、松戸、藤ヶ谷、印旛、竜ヶ崎及び松山各飛行場に同施設を構築すべき命令を下達した。

また道路をそのまま滑走路に使用することが考えられ、第10飛行師団では千住―草加間の国道の適所に所要の準備を行なった。

「特攻隊遺詠集」刊行

この度、当協会から標題の書が刊行されます。散華された特攻烈士が残された和歌等約八百首が納められており、読者は深い感銘を受けられると思います。会員各位には是非ご購入頂きますようご案内致します

（事務局長）

発売時期 平成11年8月上旬予定
発売価格 二、〇〇〇円（送料別）
申込方法 電話か葉書で当協会へ

出陣塾生壮行会の歌

五十数年前、同じ晩秋の同じ三田山で挙行された「塾生出陣壮行会」に出席し、在校生に送られ三田の山を去った昔日が、走馬灯の様に浮かび全員「丘の上」を斉唱し山上を去った。「本も閉じたよ ノートも置いた 明日はこの手に銃剣とって 命さゝさげて やり抜く覚悟 三田の思出えびらの花だ 行くぞ揃いの赤櫻」

出陣壮行会の歌
（特撰二期会会報16号より）

アメリカ取材報告

名越一荒之助

一 日米戦争と陸・海・空博物館
(名越氏の了解を得て転載)

私は平成10年3月22日から4月3日まで、アメリカを訪問して来ました。訪問先はハワイ、ワシントンDC、ロサンゼルス、の順に旅行でしたが、ワシントンは長男が駐在(時事通信社)しているために一週間滞在し、周辺部も含めて取材できました。ここでは陸海空軍の記念館を中心に、アメリカに生きたる、日米戦争の遺産を写真で紹介いたします。感想をまとめれば次の通りです。

①私はこれまで韓国(戦争記念館)

共産中国(歴史博物館、革命博物館)、旧ソ連(歴史博物館、戦争博物館、革命博物館)、フランス(軍事博物館)、オーストラリア(戦争記念館)、シンガポール(戦争博物館)、インドネシア(国軍中央博物館)、アメリカ(アリゾナ記念館、陸軍博物館、海軍博物館、航空宇宙博物館)等の記念館を見ってきましたが、どれも名稱のように、内容は戦争に関するものでした。いわゆる「平和記念館」なるものは目にはすることはできま

せんでした。

②どの記念館にも国民としての誇りや防衛精神を育成することを主題としていて、視聴覚を駆使した明るくダイナミックなもののばかりでした。

③特にアメリカのものは、当時敵国であった日本の立場を理解し、その勇戦ぶりも紹介しています。彼等の成熟した歴史認識の深さを思いました。

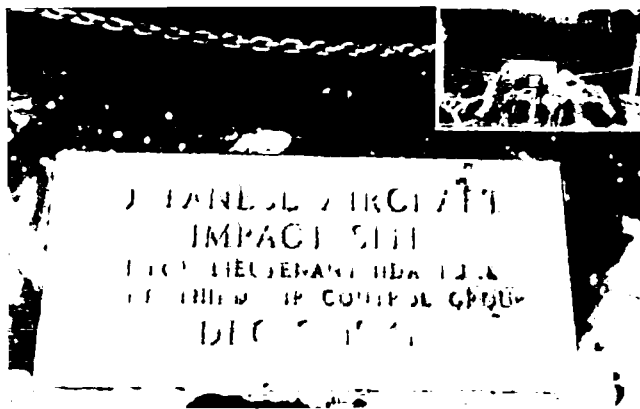
註 以下ハワイ・アリゾナ記念館、飯田房太中尉(海兵62期)慰霊碑

ワシントンDCにあるスミソニアン航空宇宙博物館、海軍記念館、オレゴン州・ブルッキングス市々庁図書室(米本土を空爆した唯一の日本海軍パイロット藤田信雄兵曹長のコーナーあり)等々の記事が述べられている。今回はその中の飯田房太海軍大尉の記事につき、名越教授のご承認を得て掲載する。(註記 木村元正)

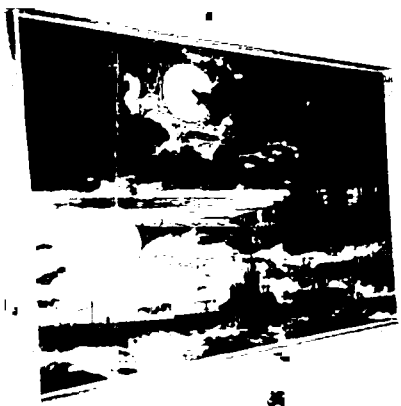
「敵海軍パイロット飯田房太中尉の慰霊碑を建てたハワイ・カネオエ米軍基地」

一九四一年十二月七日(アメリカ時間)日本は突如ハワイ軍港を奇襲した。海軍の飯田房太中尉(海兵62期・徳山中

出身、戦死後2階級特進して中佐となる)は、第二次攻撃の隊長として、カネオエ基地を攻撃中、燃料タンクが被弾した。大尉は母艦に帰るまでの燃料がないことを知ると、攻撃終了後、部下の列機を集めて帰還を誘導した。そしてただ一機戦場に引き返し、基地格納庫に体当たりして爆死した。米海軍はこの戦いぶりを「敵ながら天晴れ」として一九七一年、30周年を期して現地に左のような碑を建てたのである。



▶飯田房太中佐の顕彰碑



日本海軍の活躍



日本空軍の活躍

短歌で偲ぶ陸軍挺進部隊史

日向のくにのうまし郷
まなじり高きつわものが
ましろきバラの花負いて
遥けきおもひからせ原
“神兵と世に称へられ日向路に
天降りせしをのこなるかも”

〔解説〕昭和16年9月、白城子飛行学校に附属していた練習部は、高鍋に移り陸軍挺進練習部となった。川南村の唐瀬原に広大な降下場適地があったからである。部隊は取り敢へず新田原の既設建物に入り、唐瀬原で降下訓練を行った。唐瀬原近傍に逐次に兵舎ができて、新田原から移ったが衛戍地名は高鍋と言った。

大みことのりかしこみて
南の空に 花ひらき
たちまち降すパレンバン
凱歌のかけに 涙あり
“旺ふるなり赤道越えて天馳けり
やまとをのこの ああ晴れ姿”

〔解説〕昭和16年12月8日開戦、その後から第1挺進団の諸隊は次々と南方に向った。明光丸海没事故があって、緒戦の栄光は挺進第2聯隊が担うことになった。2月14日の早朝、輸送機、物料投下の重爆、空中掩護の戦闘機等

百機近い編隊群は、マレーのカハントクルアンを発進しパレンバンに向った。聯隊長率いる二個中隊は飛行場を、挺進団長直轄の一個中隊は精油所を、それぞれ目標として降下し、両方ともその日のうちに奪取した。翌日更に一個中隊を増援し、パレンバン市内の兵営も占領した。

目映ゆいばかりの勝利だったが、三七柱の戦死者を出した。
激しきいくさよそに見て
ひたすら練武の三星霜
朝日に映ゆる 日向灘
たそがれ沈む 尾鈴山
“いつ征くかいつ散るのかは知らねども
今日のつとめに 我は励まん”

〔解説〕第1、第2聯隊はその後もう一度南方に出るが、第3第4聯隊は17年春から19年秋までずっと唐瀬原にあって訓練に励んだ。18年6月18日挺進第4聯隊では演習中小丸川を渡渉する場面があり、前日山間部に降った雨で増水して、伊藤中尉以下八名が押流されて殉職した。この歌は当時建立した殉職慰霊碑に刻まれているが、誰の作か不明である。

披山蓋世の勇のあるも
時に利あらず 難むづか逝はかず

レイテの空やルソンの野
雄々しく散れりさくら花
“花負ひて空うち征かん雲染めん
かはね悔なく 吾ら散るなり”
“あらはさん時は来にけり千早ぶる
神に仕へし 太刀のほまれを”

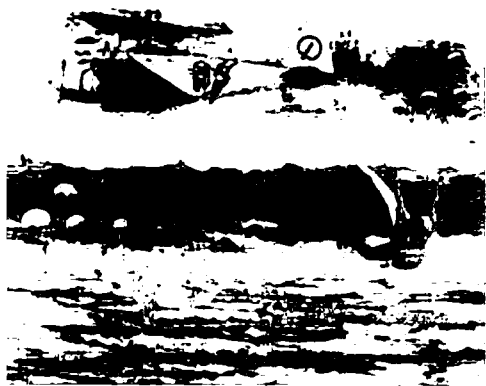
〔解説〕レイテ空挺作戦は19年12月6日に発起された。ブラウエンその他の目標に降下する為、挺進第3聯隊が宿舎としていた南サンフェルナンドの製糖工場を出た後、壁に“花負ひて”の歌が書き残されていたという。第一次降下の選に洩れた毛利義治衛生兵(戦後物故)が、写し取って帰還後伝えた。

同聯隊第2中隊長桂善彦大尉は、ブラウエン南飛行場に降下することになっていた。ルソン島アンフェレス飛行場を発進しレイテに向う途中、操縦席に現れ挺進飛行第1戦隊第3中隊長海江田岩年大尉に、紙片を手渡したが、その紙に“あらはさん”の歌が認めてあった。桂大尉以下ブラウエン南飛行場に降下した者の消息は全く不明であり、一人の生還者もない。

帰ることなき 沖繩に
莞爾と飛立つ 義烈の土
祖國の山河 はらからを
命と換へし 特攻隊

“奥山に名もなき花と咲きたれど
散りてこの世に香りとどめん”
今村美好曹長
“よしや身は千千に散るとも来る春に
また咲き出でん 靖国の宮”
関三郎軍曹

〔解説〕義烈空挺隊は体当り航空特攻を成立させる為、沖繩の敵飛行場を制圧する任務で、20年5月24日読谷、嘉手納両飛行場に突入した。特攻隊に指定されてから半年近くたつたので、書き残したものは沢山現存し、遺詠も少ないが、ここに代表として二人のものを掲げる。



降下訓練